

西之表市埋蔵文化財発掘調査概報

市内遺跡発掘調査等事業に伴う発掘調査概報

うち じょう あと
内 城 址
かみよきの かいづか
上能野貝塚

2019年3月

鹿児島県西之表市教育委員会



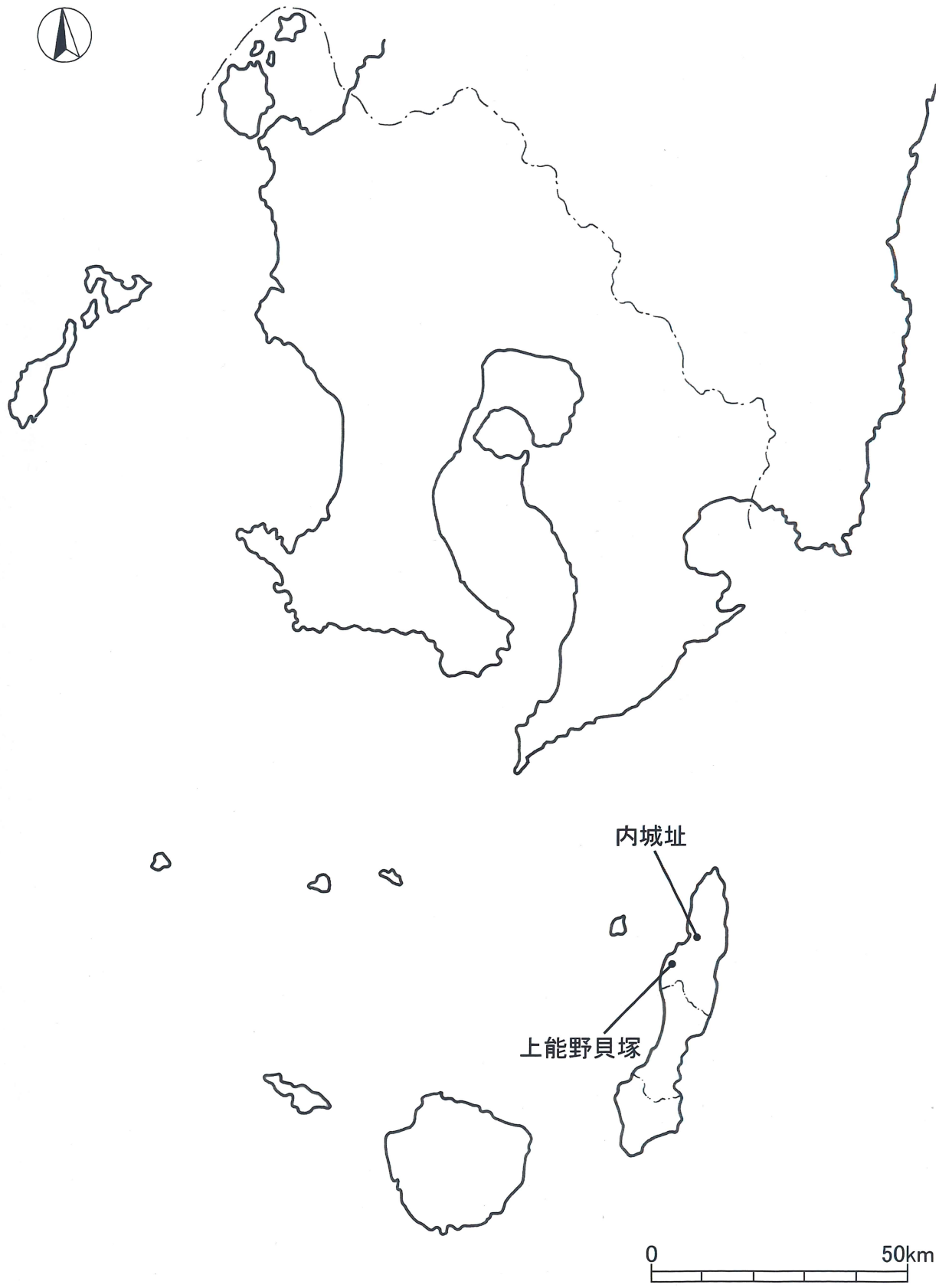
上能野貝塚出土遺物
種子島開発総合センター展示・公開

埋蔵文化財発掘調査概報抄録

ふりがな	にしのおもてしまいぞうぶんかざいはつくつちようさがいほう うちじょうあと・かみよきのかいづか							
書名	西之表市埋蔵文化財発掘調査概報 内城址・上能野貝塚							
副書名	市内遺跡発掘調査等事業に伴う発掘調査概報							
編集者名	沖田純一郎							
編集機関	西之表市教育委員会							
所在地	〒891-3193 鹿児島県西之表市西之表7612番地							
発行年月日	2019年3月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
内城址	鹿児島県 西之表市 榕城 中目	462136	19	30°	130°	確認調査 20170213	50 m ²	市内遺跡 発掘調査 等事業
				44′	59′	20170320		
				1″	56″	20180213 20180228	30 m ²	
上能野貝塚	鹿児島県 西之表市 住吉 上能野	462136	13	30°	130°	発掘調査 19720324	30 m ²	市内遺跡 発掘調査 等事業出 土遺物再 整理
				41′	57′	19720330		
				25″	42″			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
内城址	城館址	中世 近世 近現代		柱穴(礎石)		陶器類 磁器類等		
上能野貝塚	貝塚	古墳時代				土器類・石器類 貝製品・骨格器 鉄製品・獣骨・魚骨 貝類		

例 言

1. 本書は、西之表市が文化庁及び鹿児島県の補助を受け、平成28・29・30年度に実施した市内遺跡発掘調査等事業の内城址発掘調査・上能野貝塚（出土遺物再整理）の発掘調査概報である。
2. 西之表市が、文化庁及び鹿児島県の補助事業市内遺跡発掘調査等事業として発行する発掘調査概報であるため、本概報の標題を市内遺跡発掘調査等事業に伴う発掘調査概報とした。
3. 発掘調査及び発掘調査概報（整理作業）作成は、西之表市教育委員会が実施した。
4. 本書の遺物番号は本文及び挿図・図版番号と一致する。
5. 挿図の縮尺は、挿図ごとに行なった。
6. 本書の執筆・編集は沖田が行ない、遺構図及び遺物の拓本・実測及び図面の浄書は整理作業員の協力をお願い実施した。上能野貝塚出土具製品・骨角器・自然遺物の整理作業は主に整理作業員中園愛を中心に行なった。
7. 出土遺物の撮影は、菊池一文氏と沖田が整理作業員の協力を得て行なった。
8. 発掘調査及び整理作業に関して、鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター・鹿児島県歴史資料センター黎明館・鹿児島大学埋蔵文化財調査センター・南種子町教育委員会及び熊本大学・早稲田大学樋泉岳二氏・鹿児島女子短期大学竹中正巳氏等、多数の関係者より指導・助言を得た。
9. 出土遺物は西之表市教育委員会（西之表市埋蔵文化財調査室）で保管し、展示・活用する。



第1図 調査地位置図

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯

西之表市教育委員会は、文化財を活用し、郷土に誇りをもたせ、郷土愛を育み、さらにはまちづくり及び観光振興につなげていく施策を実施している。そのひとつとして、郷土の歴史を正しく知る上で欠かすことのできない埋蔵文化財を活用し広く市民に知らしめ、文化財の普及啓発に努めることが望まれている。これらのことを踏まえ、本市では平成 28 年度から平成 30 年度にかけて、文化庁の国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金を活用し市内遺跡の分布調査（試掘確認）を実施し、これまで不明とされていた遺跡の性格・範囲等を把握することと、あわせて本市の文化財収蔵施設である西之表市埋蔵文化財調査室で保存・保管されている、過去に発掘調査を終えた遺跡の未整理の出土遺物の再整理事業を実施し、これまで未確認であったことの検証に努めながら、後世まで地域の文化財を伝え活用することに努めていくこととした。

試掘確認調査は、城館址である内城址を実施し、出土遺物の再整理事業は上能野貝塚出土遺物を行うこととした。

第 2 節 調査の組織

調査組織

平成 28 年度（市内遺跡発掘調査等事業）

調査主体者	西之表市教育委員会	教 育 長	立石 望	
調査企画	西之表市教育委員会	社会教育課	課 長	松下 成悟
	〃	〃	文化係長	沖田純一郎
調査事務	〃	〃	文化係長	沖田純一郎
	〃	〃	社会教育係長	柳田さゆり
	〃	〃	主 事	荒河 翼
調査担当	西之表市教育委員会	社会教育課	文化係長	沖田純一郎
調査作業員・整理作業員	西之表市民			

●試掘確認調査遺跡 内城址

発掘調査期間 平成 29 年 2 月 13 日～平成 29 年 2 月 20 日

整理作業期間 平成 29 年 2 月 21 日～平成 29 年 3 月 17 日

調査面積 約 50 m²

●出土遺物再整理作業

整理対象遺物 上能野貝塚出土遺物

整理作業期間 平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日

平成 29 年度（市内遺跡発掘調査等事業）

調査主体者	西之表市教育委員会	教 育 長	大平 和男	
調査企画	西之表市教育委員会	社会教育課	課 長	松下 成悟
	〃	〃	参 事	沖田純一郎
調査事務	〃	社会教育課	参 事	沖田純一郎
	〃	〃	文化係長	柳田さゆり
	〃	〃	社会教育係長	西山 泰秀
	〃	〃	主 事	荒河 翼
調査担当	西之表市教育委員会	社会教育課	参 事	沖田純一郎
調査作業員・整理作業員	西之表市民			

- 試掘確認調査遺跡 内城址 発掘調査期間 平成 30 年 2 月 13 日～平成 30 年 2 月 20 日

調査面積 約 32 m²

- 出土遺物再整理作業 整理対象遺物 上能野貝塚出土遺物
整理作業期間 平成 29 年 4 月 3 日～平成 30 年 3 月 30 日

平成 30 年度（市内遺跡発掘調査等事業）

調査主体者	西之表市教育委員会	教 育 長	大平 和男	
調査企画	西之表市教育委員会	社会教育課	課 長	松下 成悟
	〃	〃	参 事	沖田純一郎
調査事務	〃	社会教育課	参 事	沖田純一郎
	〃	〃	文化財係長	鮫島 斉
	〃	〃	主 事	吉元 伸一
調査担当	西之表市教育委員会	社会教育課	参 事	沖田純一郎
調査作業員・整理作業員	西之表市民			

整理作業協力 熊本大学・鹿児島大学・早稲田大学・鹿児島女子短期大学・鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター・鹿児島県歴史資料センター黎明館・南種子町教育委員会

整理・概報作成

対象遺跡 内城址・上能野貝塚出土遺物

作業期間 平成 30 年 5 月 1 日～平成 31 年 3 月 29 日

第 3 節 調査の経過

平成 28 年度から平成 30 年度にかけて、国（文化庁）・鹿児島県の助成を得て、市内遺跡発掘調査等事業を実施した。事業内容は試掘確認調査の実施及び未整理遺物の再整理事業である。

試掘確認調査は平成 29 年 2 月と平成 30 年 2 月に実施した。未整理遺物の再整理作業は平成 28 年 4 月から平成 31 年 3 月まで実施し、概報作成に伴う整理作業については平成 30 年 5 月 1 日から平成 31 年 3 月まで実施した。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 自然環境

種子島は、大隅半島最南端の佐多岬から南東約40kmの洋上に位置する。面積447.0 m²、延長52km、幅12kmで中種子町野間の地峡部では約6kmに過ぎない。最高海拔は、282.3mの比較的平坦で、九州最高峰の宮之浦岳（標高1935m）を有する屋久島とは地形的に対照的な島である。島の長軸は、北北東から南南西に伸びており、九州本土や琉球列島の配列にほぼ近い。行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町と1市2町からなる。

西之表市は種子島の北部に位置し、本土に最も近い海の玄関口として人・物の交流拠点となっている。面積は、205.66 km²（馬毛島「8.17 km²」を含む）で、種子島の総面積の44.4%を占めており、南北の長さは25.2km・東西の幅は8.2km・周囲は63.0kmであり、東・西・北の3面は海に面し、南は中種子町と接している。気温は、平均気温19.8度の亜熱帯性の気候で四季を通して温暖であり、台風の常襲地帯に位置している。

種子島の地質構造は、島全体に海岸段丘がよく発達しており、種子島北部の国上丘陵地域では高度60m、中部の中種子町中山から油久にかけては高度80m、南部の南種子町門倉付近では高度100mに達する。この海岸段丘は西之表市の東西海岸、中種子町全域、南種子町の西側に見られ、極めて特徴的である。西海岸部には比較的砂丘が発達しているが、東海岸は断崖に富んでいる。島は、二つの断層線によって、上述したように地形上、北部・中部・南部に分けることができる。西海岸・西之表市上西大広野と東海岸・西之表市現和田之脇を結ぶ西南向き断層線が島の北部と中部の境となると言われている。北部には、島で2番目に高い天女神楽（あまめかぐら）「標高237.9m」が、風雨の浸食で開析され台地状となる。北部の大部分は、開析台地や海岸段丘が不規則に絡み合い、変化に富んだ地形を呈している。

西海岸・西之表市上西大広野と東海岸・西之表市現和田之脇を結ぶ西南向き断層線と西海岸・中種子町納官の竹之川と中種子町野間をとおり、東海岸中種子町中山を結ぶ断層線の間が、中部とされる。島の最高標高石之峰口（標高282.3m）もこの地に位置する。開析台地の発達と海岸段丘が不規則に交錯していて、一見低平と言われる種子島の地形も複雑さを呈している。

南部は、西海岸・中種子町納官の竹之川と中種子町野間をとおり、東海岸中種子町中山を結ぶ断層線から南であり、西海岸は単調で屈曲が少なく、「長浜」と呼ばれる砂丘が続く。これに対し、東海岸部は中種子町増田の犬城海岸から中種子町熊野海岸まで、沈水によって入り組んだ複雑な海岸線（リアス式海岸）が続き、美しい風景を形成している。南部の中央部は、起伏の少ない中種子中央台地と呼ばれ、これに続く南種子中央台地は比較的開析が進み、地形が複雑となる。西海岸は、海岸段丘も急傾斜し、平地が少なくなる傾向にある。南種子町門倉岬から竹崎にかけては、南流する鹿鳴川・郡川・宮瀬川などで沖積平野が形成される。

島の基盤となる地層は熊毛層群と呼ばれる砂岩・頁岩の互層である。この層の上を不整合に茎永層群及び増田層、長谷層、竹之川層が覆っている。

熊毛層群の堆積した時代は、新生代古第三紀、始新世の頃とされ、本層群は大きくさらに3つの

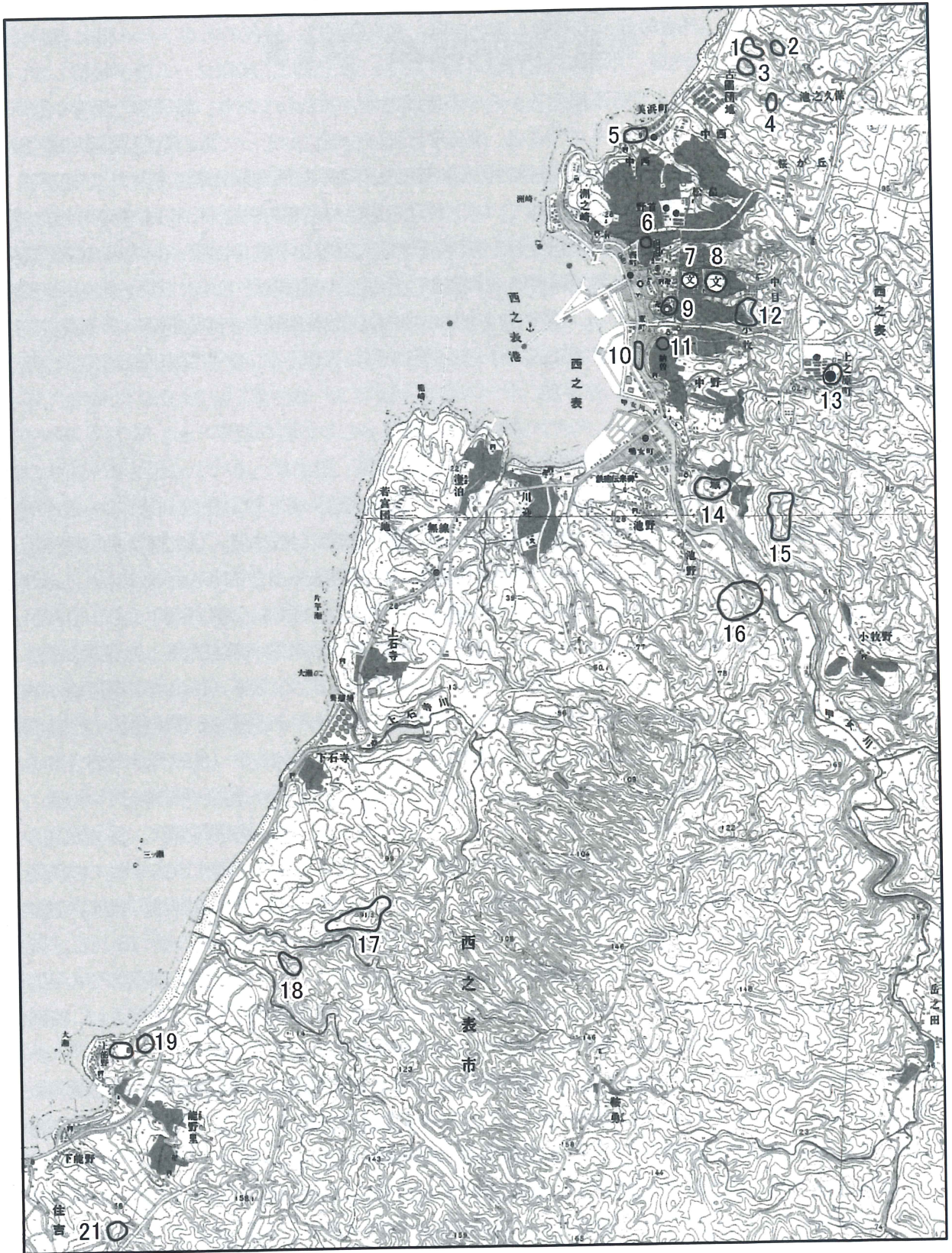
層に分けられている。(門倉崎層・立石層・西之表層) 荃永層群は、特色のある3つの層に細分化されており、田代層・河内層・大崎層と名付けられている。最上部は、新期ローム層が堆積している。荃永層群はそこから出土する示準化石から中新世前期頃と言われており、種子島の環境や地形の変化の過程を推論できる貴重なものである。増田層はほぼ全域にわたって認められる淡茶褐色砂を主体とする地層である。長谷層は中種子町中田以南から南種子町門倉岬に至る地に広く発達し、礫層が主体であり、第四紀前期と推定されている。竹之川層は中種子町竹之川から中種子町屋久津に至る西海岸地帯に見られる。基底礫層を伴い熊毛層群や増田層を不整合に覆い、平均10mの層位である。他、火山灰起源の風成層であるローム層や、沖積世の堆積物として、旧砂丘砂層・現砂丘砂層・河川堆積物などが見られる。種子島は全島の99%以上が堆積岩からなるが、一部の限られた地にアルカリ岩体のランプロファイア・セキエイハンガン岩体・ゲンブ岩質岩塊の枕状溶岩と3種類の火成岩が見られる。

第2節 歴史的環境

種子島の名は古く天武6年(677年)に史上に現れ、以後は随・唐と日本を結ぶ南方ルートの港として重要な位置を占めるに至った。鎌倉時代に入って種子島は「上之郡」・「中之郡」・「下之郡」と3つの郡に分けられ、この「上之郡」が今日の西之表市の行政区域に当たるものと推定される(「中之郡」は現在の中種子町・「下之郡」は現在の南種子町に当たると推定)。建仁年間(1201年頃)平信基が南海12島を領し、種子島入りした。居館は「上之郡」の赤尾木周辺にあったと思われる、以後赤尾木は島主種子島氏の府元として栄えていくこととなる。天文12年(1543年)種子島の南端に漂着した中国船に乗船していた、ポルトガル人によってもたらされた鉄砲(火縄銃)は、赤尾木の鍛冶街によって国産化され、近世日本への幕開けとなった。元禄11年(1698年)琉球王から贈られた甘藷が島主の政策によって栽培をはじめて成功し、その後甘藷が全国へ伝播していったことは史実でも明らかとなっている。この南方ルートの要津赤尾木は日向の細島を経て、豊後水道から瀬戸内海を通り京都へ向かう、直通ホットラインでもあり、このルートを通じて、中央の文化をダイレクトに吸収したため、学問・武芸・技芸の上でも中央に比肩し得る多くの学者・名人・達人を輩出し、その文化力も高かった。

安政年間(1854年~1860年)から赤尾木は「西之表」と呼ばれるようになり、次第にこの呼び名は「上之郡」全域を代表するようになった。明治以降は全国から多数の移住者を受け入れ、在地の文化と移住者の文化が融合し、種子島島独特の文化が育まれていくこととなった。

考古学的見地から種子島を概観すると、種子島は南島北部文化圏(本土南九州の影響を受けた南九州文化圏)に属すると考えられている。この南九州文化圏に包括される種子島の遺跡を概観してみると、平成4年に発掘調査が行われた横峯C遺跡で礫群が検出され、約4万年前の後期旧石器時代の年代値が測定され、種子島で初めて旧石器時代の遺跡の存在が明らかとなった。その後の調査で、旧石器時代の遺跡が続々と発見され、立切遺跡(中種子町)や、同時期の国内最古級の落とし穴が多数発見された大津保畑遺跡(中種子町)などがあり、旧石器時代の様相を考えるうえで全国的に注目されている。それ以後のナイフ形石器の文化層は現在種子島では確認されていないが、いわゆる旧石器時代終末期とされている細石刃核・細石刃が確認された遺跡は湊遺跡・大中峯遺



第2図 内城址・上能野貝塚と周辺遺跡図

第1表 内城跡・上能野貝塚周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	池之久保Ⅱ	西之表市上西池之久保	縄文時代前期	
2	池之久保Ⅰ	西之表市上西池之久保	縄文時代前期	
3	池ノ窪	西之表市上西池之久保	縄文時代後期	
4	松原	西之表市上西池之久保	縄文時代 中世(室町)	
5	古城跡	西之表市榕城美浜町	古代 中世 近世	
6	本城	西之表市榕城松島	縄文時代前期・後期・晩期 古代 中世 近世	昭和34・35年発掘調査
7	内城址	西之表市榕城中目	古代 中世 近世	平成28・29年度試掘確認調査
8	赤尾木城跡	西之表市榕城中目	近世	市指定文化財(史跡) 平成14年詳細分布調査
9	坂ノ上城跡	西之表市榕城中目	古代 中世 近世	平成6・7・9年詳細分布調査
10	黒山尻	西之表市榕城池田	古代 中世 近世	
11	納曾	西之表市榕城納曾	縄文時代後期	昭和50年発掘調査
12	新城跡	西之表市榕城中目	古代 中世 近世	
13	農林	西之表市榕城上之原	縄文時代早期 古墳時代 古代	
14	城	西之表市榕城城	古代 中世 近世	
15	古城	西之表市榕城城	中世	
16	屋久田城跡	西之表市下西池野	古代 中世 近世	
17	嶽ノ中野A	西之表市住吉上能野	縄文時代 古墳時代	
18	嶽ノ中野B	西之表市住吉上能野	弥生時代 古墳時代 古代(平安)	平成6年発掘調査
19	上能野貝塚	西之表市住吉上能野	弥生時代後期～終末	昭和47年発掘調査
20	能野焼窯跡	西之表市住吉上能野	古代 中世 近世	市指定文化財(史跡)
21	仏ヶ峯	西之表市住吉下能野	古代(奈良 平安)	

跡・葉山遺跡（西之表市）・立切遺跡（中種子町）・銭亀遺跡（南種子町）などがある。湊・大中峯遺跡は表面採集資料ではあるが、細石刃核、細石刃、剥片、碎片が採集されている。

縄文時代では、近年の調査で縄文時代草創期の良好な資料・遺構が相次いで発見されている。奥ノ仁田遺跡（西之表市）の調査で縄文時代草創期の遺跡が本土以南で初めて確認され、その後三角山遺跡（中種子町）・鬼ヶ野遺跡（西之表市）・横峯C・D遺跡の調査で隆帯文土器片や石器類、多数の遺構が発見されている。その後の縄文時代早期では前平式・吉田式・塞ノ神式・平椀式などが出土した遺跡の報告例が多数あり、良好な資料が増加している。近年の調査ではこれまで報告例が少なかった押型文土器・手向山式土器の出土報告例もみられるようになってきている。平成15年度から平成23年度にわたり、西之表市東南部地区（安城・立山地区）において県道整備事業に伴う発掘調査が西之表市教育委員会により実施され、縄文時代早期の資料数（主に吉田式土器が主体）が増加してきている。また、遺跡や出土遺物が国の重要文化財に指定された「廣田遺跡（南種子町）」などをはじめとする、国内最古・国内最多・国内新発見など極めて重要な遺跡・遺物が島内で発見・報告されている。また、砂丘に埋葬址が形成され良好な状態で遺構や遺物が発見されていることも特筆される。

時代が移り、8世紀に入ると多禰国が設置され、大和朝廷との関係が深くなるが、国府・国分寺（島府・島分寺）の所在地は未だ解明されていない。中世に入ると「律宗から法華宗への全島宗教改革」、「遣唐船・遣明船の寄港地」、「火縄銃の伝来・国産化」、「ザビエルの寄港」など島で重要な出来事があり、文献史上では確認されているが、考古学的な調査は行われていない。江戸時代に入ると、「甘藷伝来」、「カタリナ永俊尼の種子島への配流（キリスト教）」、「名跡松寿院の三大土木工事・種子島家墓地の整備」などの特筆される出来事があるが、やはり文献史では垣間見ることができるが、考古学的な調査は行われておらず、先史時代の考古学的調査は行われているが、中世以降については、発掘調査等はあまり行われていない状態であり、今後の調査に期待するところが大きい。

直近の情報として、西之表市の西海上12kmに位置する馬毛島（現在無人島）で、中世頃と思われる埋葬人骨と古墳時代の貝塚が発見された。発見の経緯は厚生労働省の馬毛島での戦没者遺骨収集確認調査による発見であった。

確認された土器は上能野式土器と呼ばれるもので、くしくも今回出土遺物再整理事業を行っている、上能野貝塚出土土器を標識とする土器である。

馬毛島にはこれまで、埋葬人骨と上能野式土器が出土した椎ノ木遺跡も確認されており、上能野式土器を考察する上でも、種子島から離れた馬毛島で出土したことが非常に興味深く、今後の上能野式土器の分布・集団・その流れを考察していくうえでも、非常に貴重な発見となった。

第三章 内城址発掘調査の概要

第1節 遺跡の位置と環境

内城址は西之表市街地に位置する。その地は、かつては榕城中学校であり、種子島で最も大規模な中学校であったが、近年の少子化の影響で平成21年(2009)3月閉校となり、榕城中学校として62年の歴史に幕を下ろすことになった。現在、校舎・体育館などの施設及び校庭は閉校時のままの状態を維持している。内城址に隣接する東側には榕城小学校がある。この地も、城址であり、「赤尾木城址」として西之表市の文化財に指定(史跡)されている。このあたりが、島を統治していた種子島氏の近世における居城で、その城下には武士の集住地と役所からなる「麓」が形成された。

鎌倉時代のはじめ、南海12島の支配を命じられ種子島家の祖先とされる平信基が下島以来、藩政末までの約700年間にわたって種子島氏が種子島を支配することになる。

種子島氏については、名越氏が島津本庄地頭職を有し、肥後氏がその地頭代職となり、やがてその一族が現地(種子島)に下向し、島の名をとり、種子島姓を名乗り、在地領主化、島主化していったものと考えられている。いづれにしても、初代信基から25代久尚までの間は種子島氏が島を統治していた。

種子島氏は戦国時代より島津氏への従属を強め、近世には薩摩藩の家老をつとめるなどして活躍した。慶長3年(1598)に種子島久時が島津氏の家老となり、種子島氏は鹿児島鶴丸城下に屋敷を構えた。種子島氏は海のルートを通じて、中世には種子島氏独自で琉球と積極的な交易を行っていたが、慶長14年(1609)島津氏が琉球を征服し、琉球は薩摩藩の支配下で近世を過ごすこととなり、近世以降は薩摩藩の一員としての種子島氏と同藩支配下の琉球の関係になり、種子島久時「第18代島主 延宝7年(1679)宝永7年(1710)まで薩摩藩の家老」は種子島氏としてではなく、薩摩藩家老としての立場で琉球国王とやり取りをしており、文献史料でその事が確認されている。

島を統治していた種子島氏であるが、初代信基から5代時長までの間は種子島家の伝説・伝承の時代とされ、文献等では在地来島したという確実な史料は見られず、6代時充の頃から在地来島したと考えられている。鹿児島県指定文化財である「種子島家文書」のなかの、「種子島譜(第一次家譜)延宝5年(1677)家老上妻隆直が編纂」・「種子島正統系図(第二次家譜)明和6年(1769)家老平山頭友が編纂」・「種子島家譜(第三次家譜)文化7年(1810)家老上妻宗恒によりひとまず完成。正本・副本2部あり、正本は鹿児島市の種子島屋敷で保管していたが、昭和20年(1945)空襲で全て焼失する。種子島西之表市の種子島家にあった副本は、鹿児島に貸し出していた昭和27年(1952)の火災で多くが消失することとなるが、東京大学史料編纂書の謄写本や、西之表市在住の教員であり郷土史家でもあった鮫島宗美氏が戦後より進めていた訓読作業の史料をもとに復元されたもの、天保15年(1844)種子島家家臣羽生道潔により編集された「種子島家歴史譜写録抄」(すでに存在していた漢文体の種子島譜略を和文で記し直し、読みやすくしたもの。元祖信基に関するエピソードなどがより具体的に記されている。)などによると、6代時充は本城に城を築き、12代忠時は池田の黒山尻に築き、16代久時は野久尾に築いている。17代忠時のころの寛永

20年(1643)から、島主は鹿児島に移住せよとの島津氏の命があり、以後代々鹿児島での生活が中心となっていた。

城と言われているものは、島主の館、すなわち屋敷が所在した地と考えられ、天守閣をもたない地形を利用し砦を築いた山城であったと考えられる。

第2節 内城址について

種子島は武家社会南限の地であるが、種子島氏歴代島主の城館についての史料や文献などは非常に乏しい。城館址としては赤尾木城址(上ノ城)で、土塁・石垣(サンゴ)などを確認できるが、城館に関する遺物やその他の遺構は確認されていない。平成14年に榕城小学校校舎建て替え事業に伴う試掘確認調査を西之表市教委が行なっているが、赤尾木城址(上ノ城)に関する遺物・遺構は確認されず、校舎の周辺は著しい開発を受けていることがわかっている。

城に関する記述は、先述した種子島家文書等に記載されている他に、元禄2年(1689)種子島家臣上妻七兵衛隆直によって書かれた「懐中島記」に歴代島主の居城の変遷が記されている。

懐中島記

島主住所号赤尾木宅地之事

信基六代時充 本城

十二代忠時 池田黒山尻

十三代恵時 屋久田

十四代時堯 本源寺後内城

十六代久時 野久尾後号石峯

慶長14年(1609)移内城

十七代忠時 寛永元年(1624)家内城上屋地至干令 とある

17代忠時のころ、寛永元年(1624)に、内城(旧榕城中の地)から上屋地(現榕城小学校の地)へ移動していることがわかる。

但し、内城の起源については、14代時堯・16代久時のころ、に内城の名が表れている。

種子島家譜には、元和9年(1623)12月内城より上ノ城(現：榕城小学校の地)に移る・・・との記載がある。

文献史料、種子島家譜・懐中島記に掲載されていることから、判断すると、17代島主忠時が内城の城館を上ノ城(赤尾木城)に移動したことが言える。

なお、赤尾木城という記載は古文書類には見られず、上ノ城(内城の上の地に位置する城の意か)として記載されている。



遺跡 No.	遺跡名	所在地	時代
213-19	内城址	鹿児島県西之表市榕城中目	古代、中世、近世
213-1	本城	鹿児島県西之表市榕城松島	縄文時代、縄文時代 前期、縄文時代 後期 縄文時代 晩期、古代、中世、近世
213-25	赤尾木城址	鹿児島県西之表市榕城中目	近世
213-20	坂ノ上城跡	鹿児島県西之表市榕城中目	古代、中世、近世
213-18	新城跡	鹿児島県西之表市榕城中目	古代、中世、近世
213-23	黒山尻	鹿児島県西之表市榕城池田	古代、中世、近世
213-9	納曾	鹿児島県西之表市榕城納曾	縄文時代、縄文時代 後期

0 500m

第3図 内城址及び周辺遺跡位置図・周辺遺跡地名表

第3節 調査の概要

(1) 調査方法

内城址の発掘調査は平成29年2月(平成28年度)と平成30年2月(平成29年度)に2度にわたり実施した。調査の目的は城館址につながる遺構及び遺物の確認と遺跡の範囲等の把握であった。調査トレンチを旧榕城中学校校庭内に設置し、掘り下げは人力または重機で表土を除去した後、全て人力で掘り下げを進め、遺物・遺構の有無を確認した。

校庭は、市内スポーツ少年団及び種子島中学校の部活動で使用しており、その活動に支障のない場所に調査トレンチを設置することとしたため、使用頻度の高い校庭中央部にはトレンチを設置していない。トレンチの大きさは土層の堆積状況の確認や遺物の出土状況に応じて、適宜変更しながら調査に取り組んだ。

(2) 平成28年度の調査

旧榕城中学校校庭内にトレンチを6か所設置した。土層はこれまでのグラウンド整備や、それ以前の開発で、著しく攪乱を受けているものが見受けられ、攪乱層からの遺物の出土が確認された。3トレンチからは長さは30cmをこえ、厚さは約10cmの礫が3点隣接して出土した。いずれの礫も上面は平坦であった。礫の検出面はトレンチの最下層部分にあたり、周囲は一部攪乱を受けている。礫には人為的な使用痕はみられない。また、1つの礫に関しては周囲に掘り込みが見られるように感じた。トレンチ断面からの礫の検出もあったため、今回は写真撮影・礫の配置図の図面をとり、埋戻し現況に復した。現場の状態から、この礫は礎石ではないかと思われ、29年度に再度調査を行い、確認することとした。

土層の堆積については、本来なら標準土層で表すが、今回のトレンチ調査では各トレンチで著しく土層の堆積が異なるため、各トレンチごとに詳述する。

土層

1 トレンチ

I層 表土

II層 砂層

III層 黒茶褐色土 硬い

IV層 暗茶褐色土 ATパミスが不規則に混じる 攪乱層

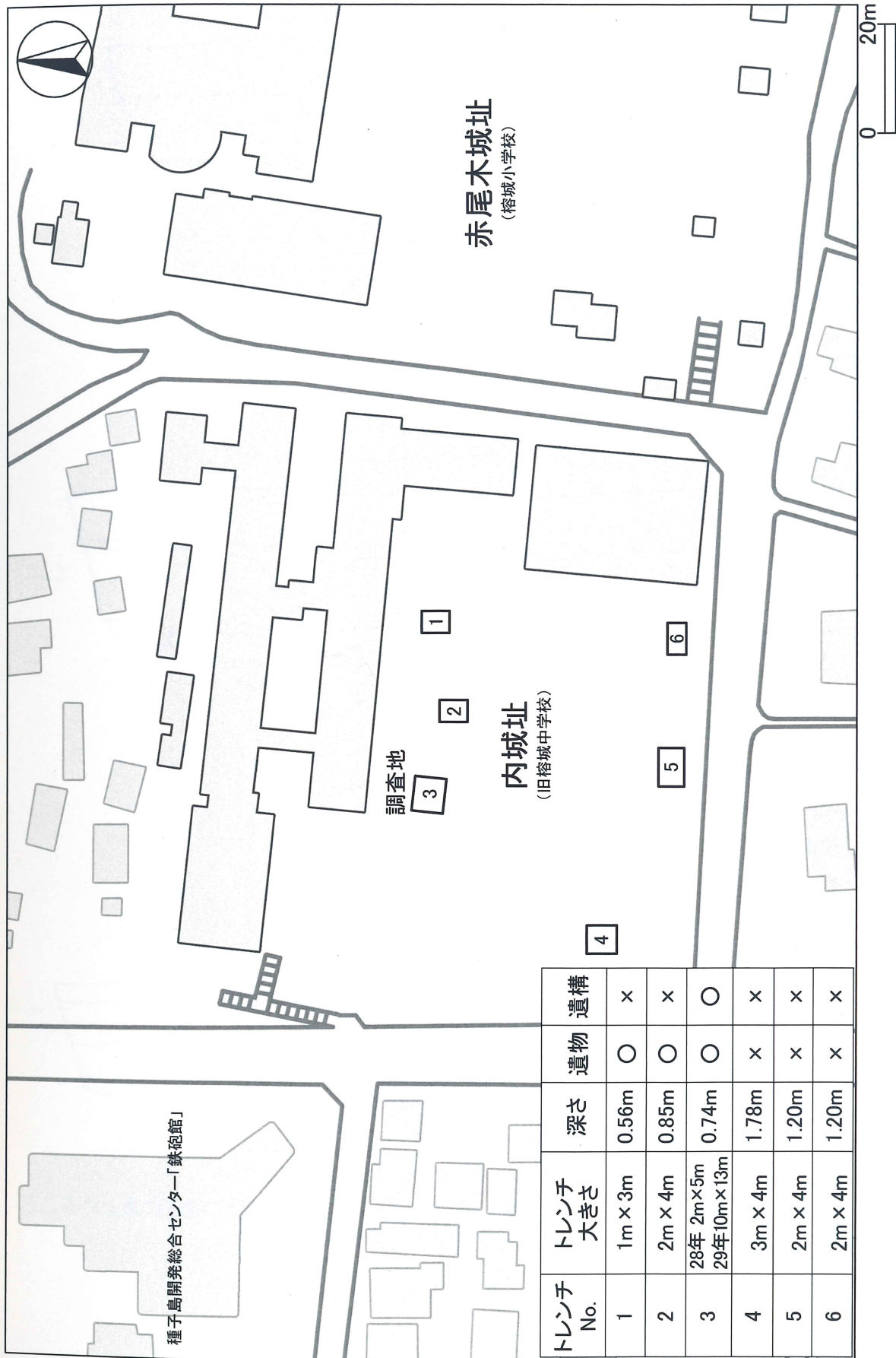
2 トレンチ

I層 表土

II層 黒茶褐色土 ATパミス交り、炭化物あり、攪乱層

III層 茶褐色土 ATパミスが混じる

IV層 ベージュ色ローム土



トレンチ No.	トレンチ 大きさ	深さ	遺物	遺構
1	1m × 3m	0.56m	○	×
2	2m × 4m	0.85m	○	×
3	28年 2m×5m 29年 10m×13m	0.74m	○	○
4	3m × 4m	1.78m	×	×
5	2m × 4m	1.20m	×	×
6	2m × 4m	1.20m	×	×

第4図 調査トレンチ配置図

3 トレンチ

- I層 表土 上位砂層、下位硬い茶褐色ローム
- II層 ベージュ色ローム 硬い 盛り土
- III層 黄茶褐色土 黒色土も混じる
- IV層 黒茶褐色土・灰茶褐色土 漸移 非常に硬い
- V層 茶褐色土 造成の可能性あり

4 トレンチ

- I層 表土 上位砂層、下位硬い茶褐色ローム
- II層 黒茶褐色土 硬い パミスが混じる
- III層 乳明茶褐色土 硬い 大きめのパミスが混じる
- IV層 乳茶褐色土 やや明るい
- V層 明黒灰褐色土
- VI層 黒灰褐色土
- VII層 黒褐色土
- VIII層 黒色土 細粒炭化物が混じる
- IX層 ベージュ色ローム土 下位にATパミスあり

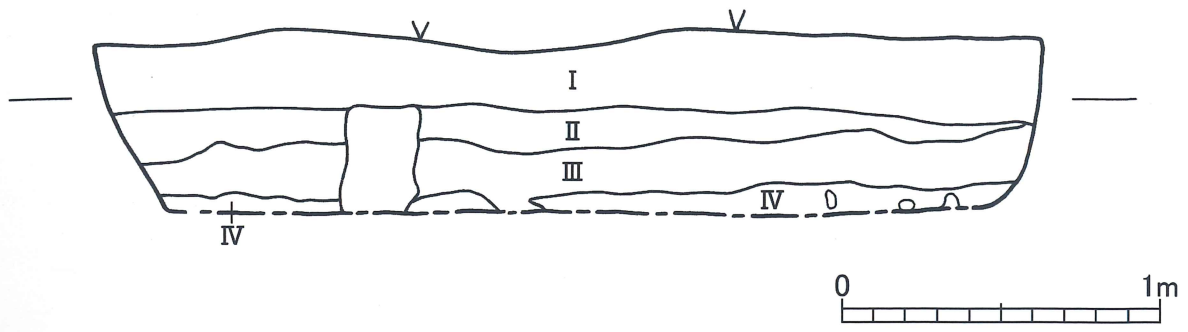
5 トレンチ

- I層 表土 砂・ローム攪乱
- II層 ベージュ色ローム土
- III層 黒褐色土 上位に黄橙色土・砂まじりの攪乱層あり
- IV層 乳茶褐色ローム 下位にATパミスあり
- VI層 暗茶褐色ローム土

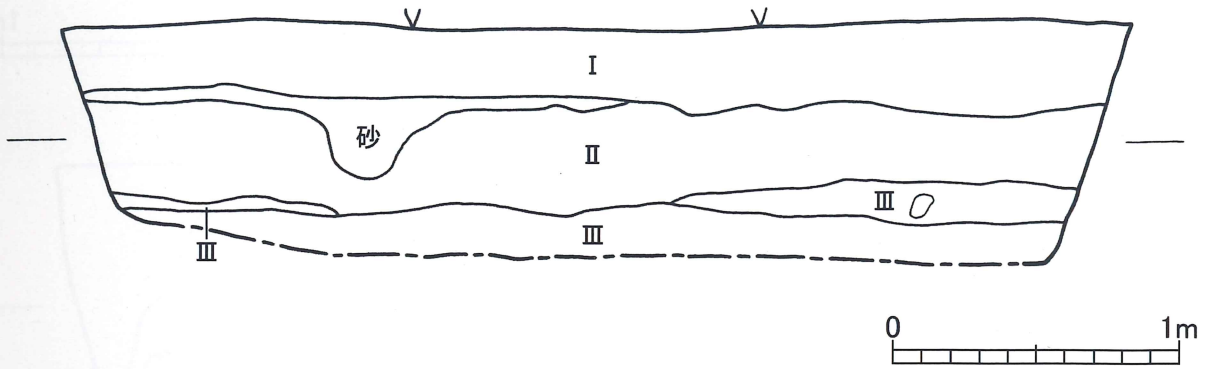
6 トレンチ

- I層 表土 攪乱層
- II層 造成の際に生じた穴 コンクリート等が多数混在する

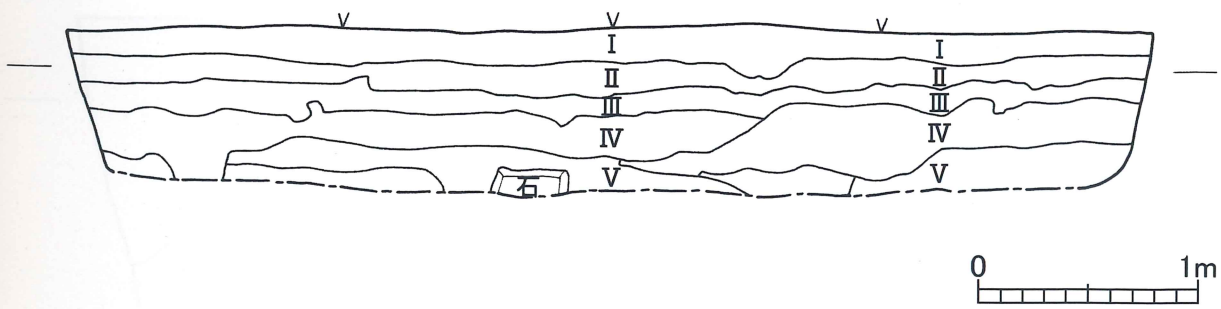
なお、平成28年度の調査で確認された遺構・遺物については平成29年度の報告にまとめることとした。



トレンチ1西側土層断面図

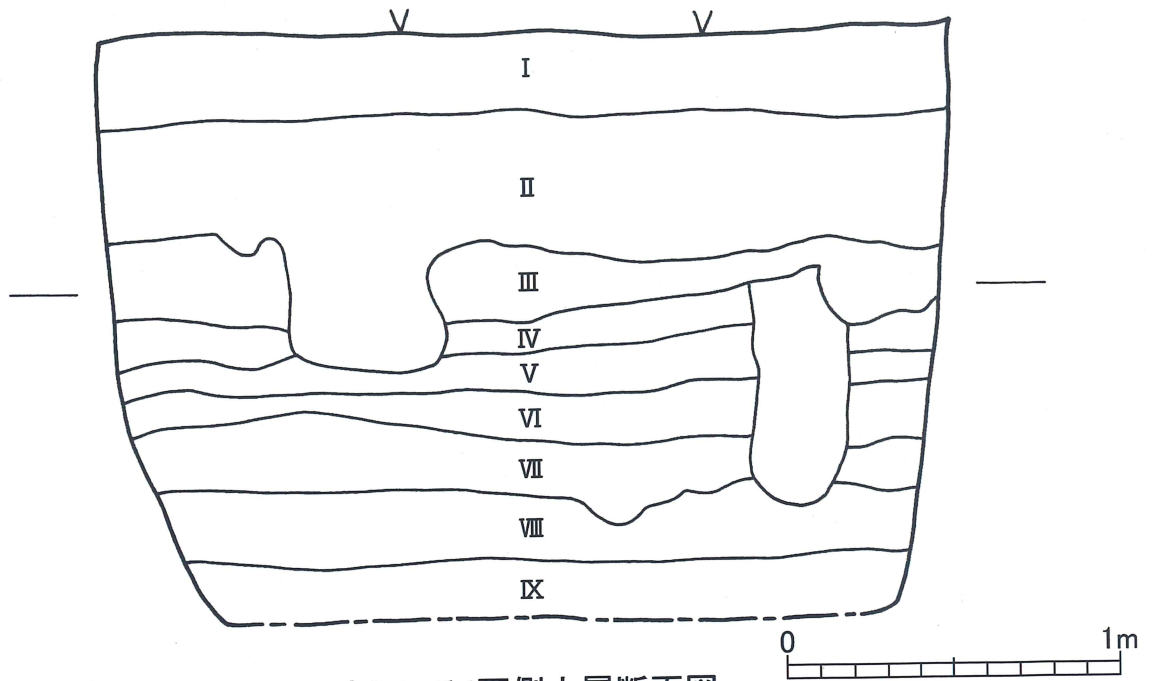


トレンチ2東側土層断面図

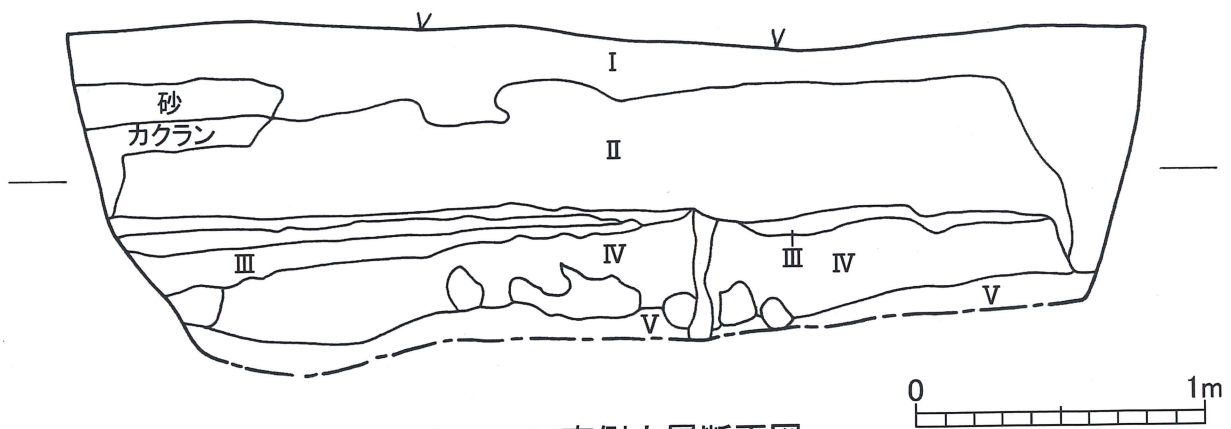


トレンチ3東側土層断面図

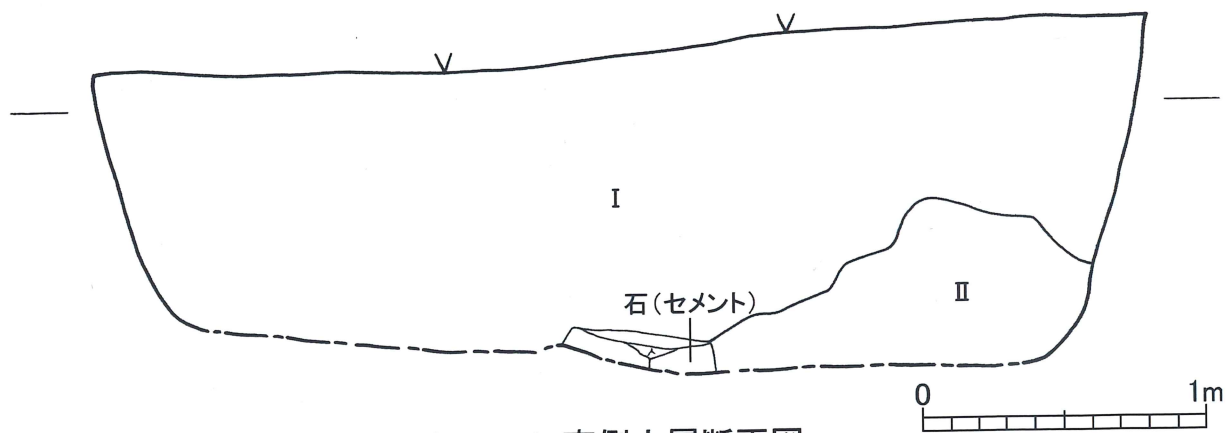
第5図 トレンチ土層断面図



トレンチ4西側土層断面図

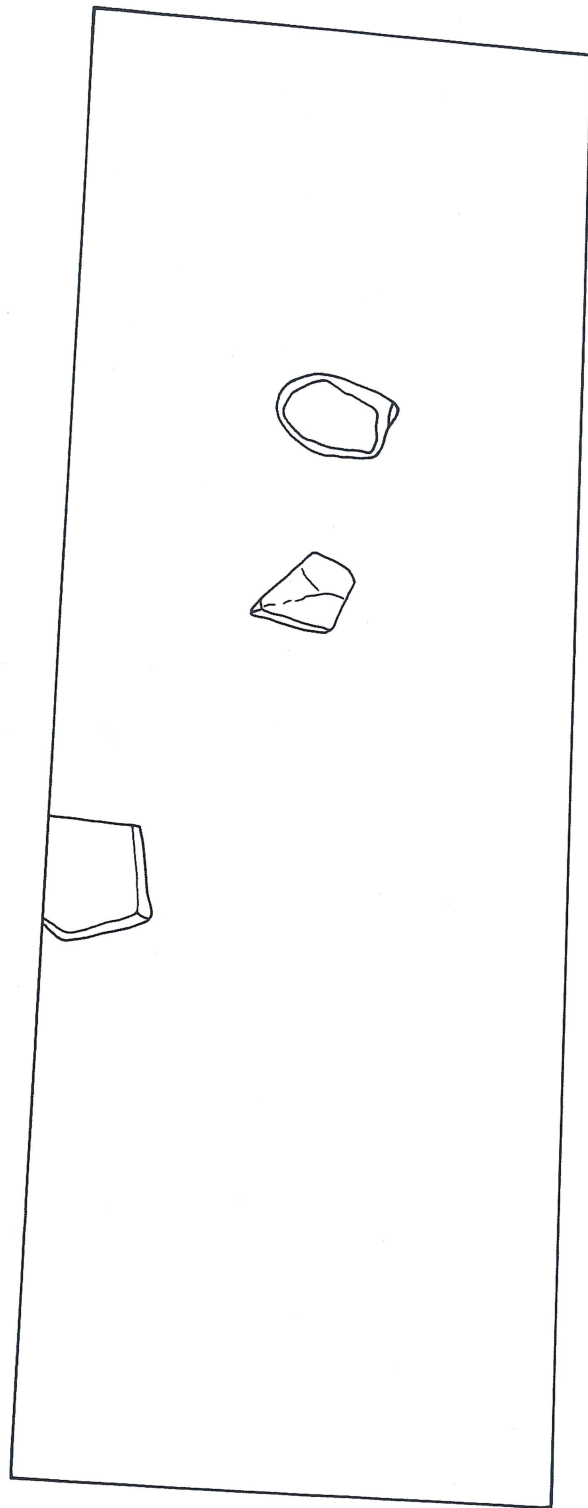


トレンチ5南側土層断面図



トレンチ6南側土層断面図

第6図 トレンチ土層断面図



第7図 3トレンチ遺構検出状況

(2) 平成 29 年度の調査

平成 28 年度行った調査で、3 トレンチから柱穴（礎石）と思わしきものを確認していたため、平成 29 年度は 3 トレンチを拡張して再度調査を行ない、遺物・遺構の有無の詳細な調査に努めることとした。調査対象は 28 年度調査の 3 トレンチを拡大し、13m×10mとした。

人力で慎重に掘り下げを進め、昨年度検出した礫を確認し、その後周辺を慎重に広げながら掘り下げを進めて遺物・遺構の確認に努めた。

遺構

平成 28 年度の礫を検出した同じ面から、最終的に礫が 7 点検出され、同時に土坑も 2 基検出された。礫は上面は平坦であり、地面に設置している部分も平坦に近いものである。各礫の最大幅は、約 50 cm 程度、厚さは 10 cm を超える。石材は全て砂岩であり、使用痕等は見られない。礫は掘り込みを持つものも見られ、形態から柱穴と判断した。掘り込みラインの図化を行ったが、完全な掘り下げは行っていない。土坑については、検出面ラインの確認を行い、埋土を確認したに留め、完掘しての掘り下げは行わなかった。柱穴（礎石）の配置は、ほぼ東西方向に 2 列に規則的に配置されているように思われ、何らかの建造物の礎石であると思われる。この柱穴（礎石）と思われるラインは、南東および北西方向にさらに拡張して調査を行えば、まだ発見される可能性がある。検出状態の記録をとったのち、柱穴（礎石）等は全てそのままの状態で慎重に埋戻し、調査地は現況に復した

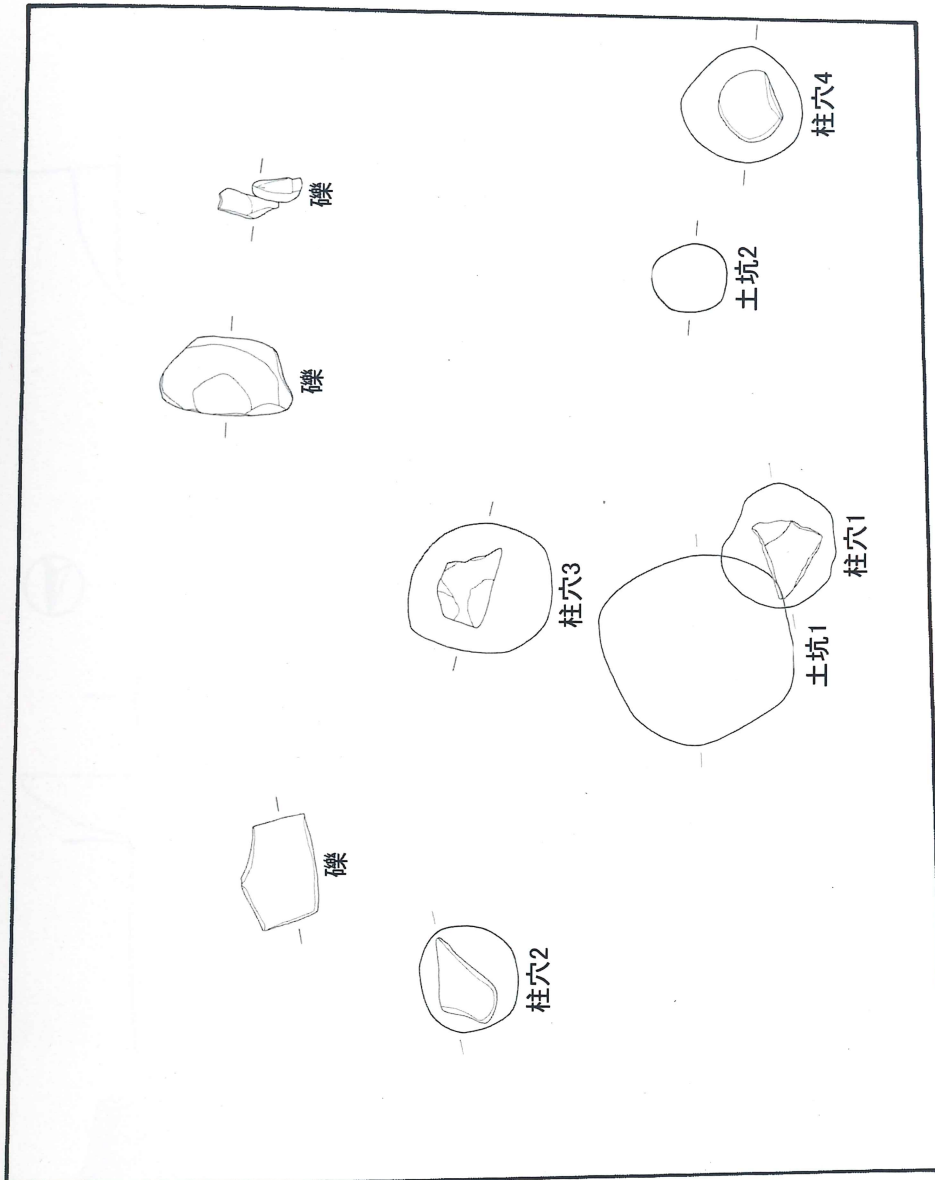
遺物

遺物の出土は、平成 28 年度・29 年度の調査を通して総数約 20 点であり、遺物の出土量は少なかった。出土物の主なものは、平成 28 年度の 3 トレンチ調査地からのものである。

1 から 10 は平成 28 年度の調査で出土したものである。

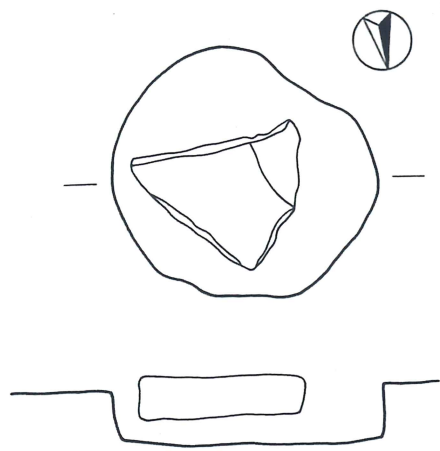
1 から 3 は、3 トレンチのⅡ層・Ⅲ層間から出土したもので、1 は竜泉窯系青磁碗片であるが時期は不明である。2 は中世と思われる白磁の底部である。3 は近世と思われる肥前磁器の碗である。4 から 6 は、1 トレンチⅢ層から出土したもので 4 は肥前磁器の皿の口縁から底部片、5 は薩摩苗代川系の陶器の甕・壺類、6 も薩摩苗代川系のすり鉢口縁部であり、時期はいずれも近世と思われる。7 は 2 トレンチ表層から出土したもので、急須身である。時代は近現代のものである。8 から 10 は、1 トレンチⅢ層から出土したもので、8 は陶磁器で白色の色絵小杯であり、時代は近現代である。9 は陶器の鉢の口縁部であるが、詳細は不明である。10 は厚さ 1.7 cm の現代の瓦片である。

11 から 15 は、平成 29 年度の調査地から出土したものである。11 から 13 は近世のもので、11 は肥前磁器の碗、12 は薩摩焼で加治木始良系、ほぼ関係に近い碗であり、時代は 18 世紀ごろが主と思われる。13 は焙烙であり、本市では初めての出土となる。14 は近代の薩摩焼苗代川系の甕・壺類と思われる。15 は施釉陶器の碗であるが、詳細は不明である。

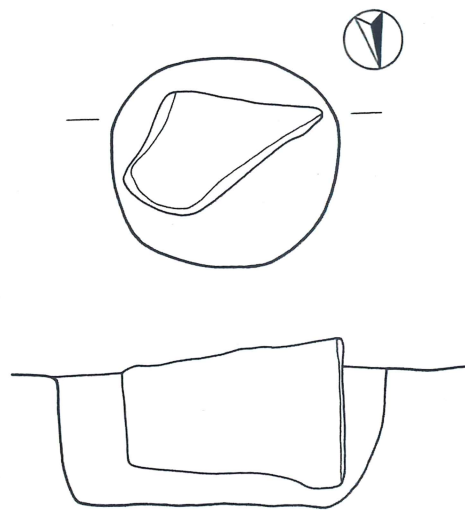


第8図 柱穴・土坑配置図

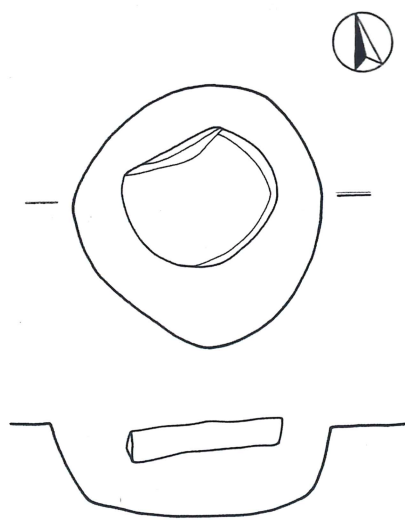




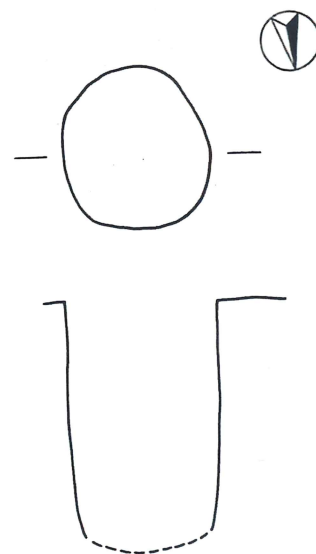
柱穴1



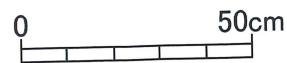
柱穴2



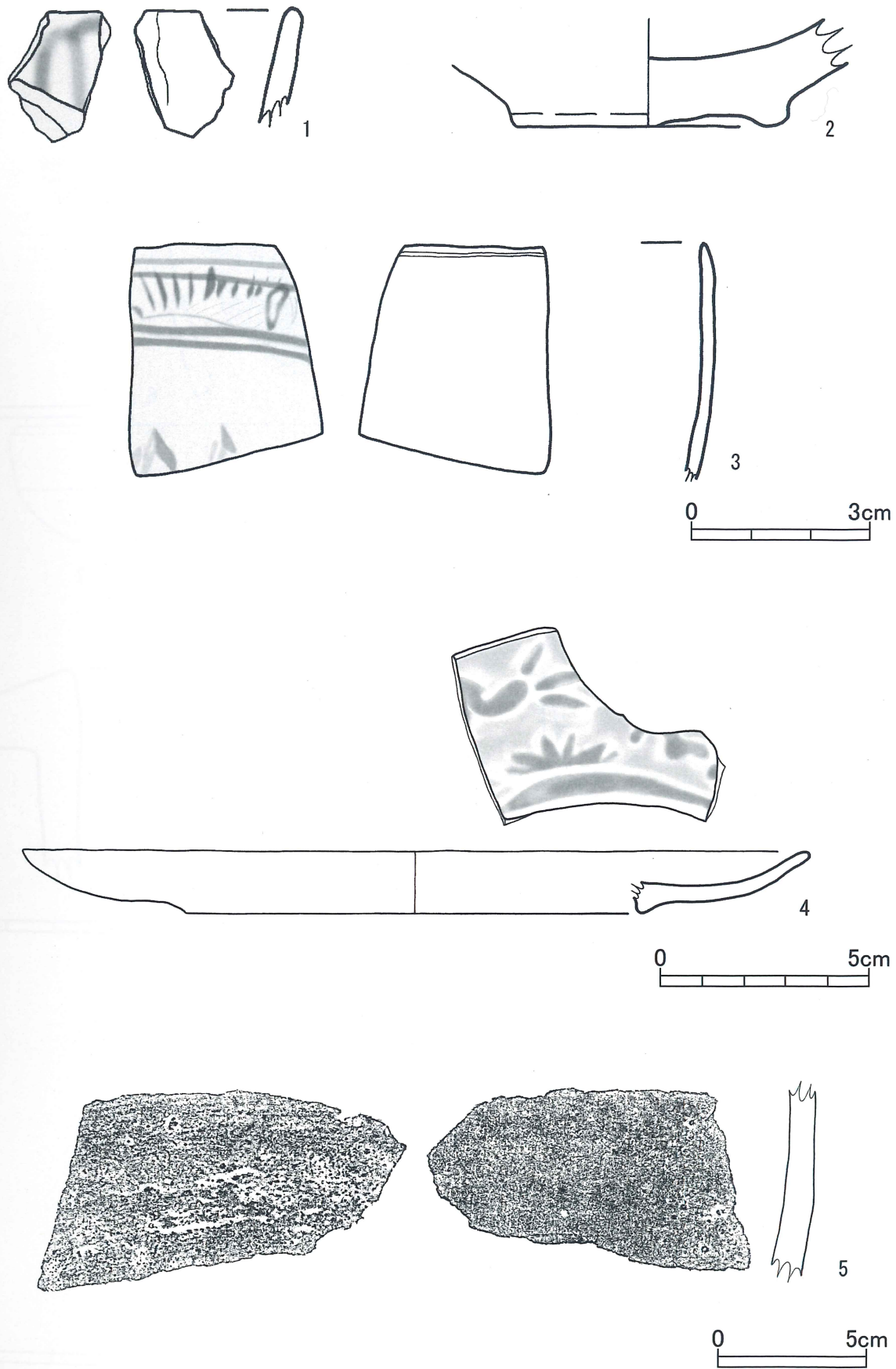
柱穴4



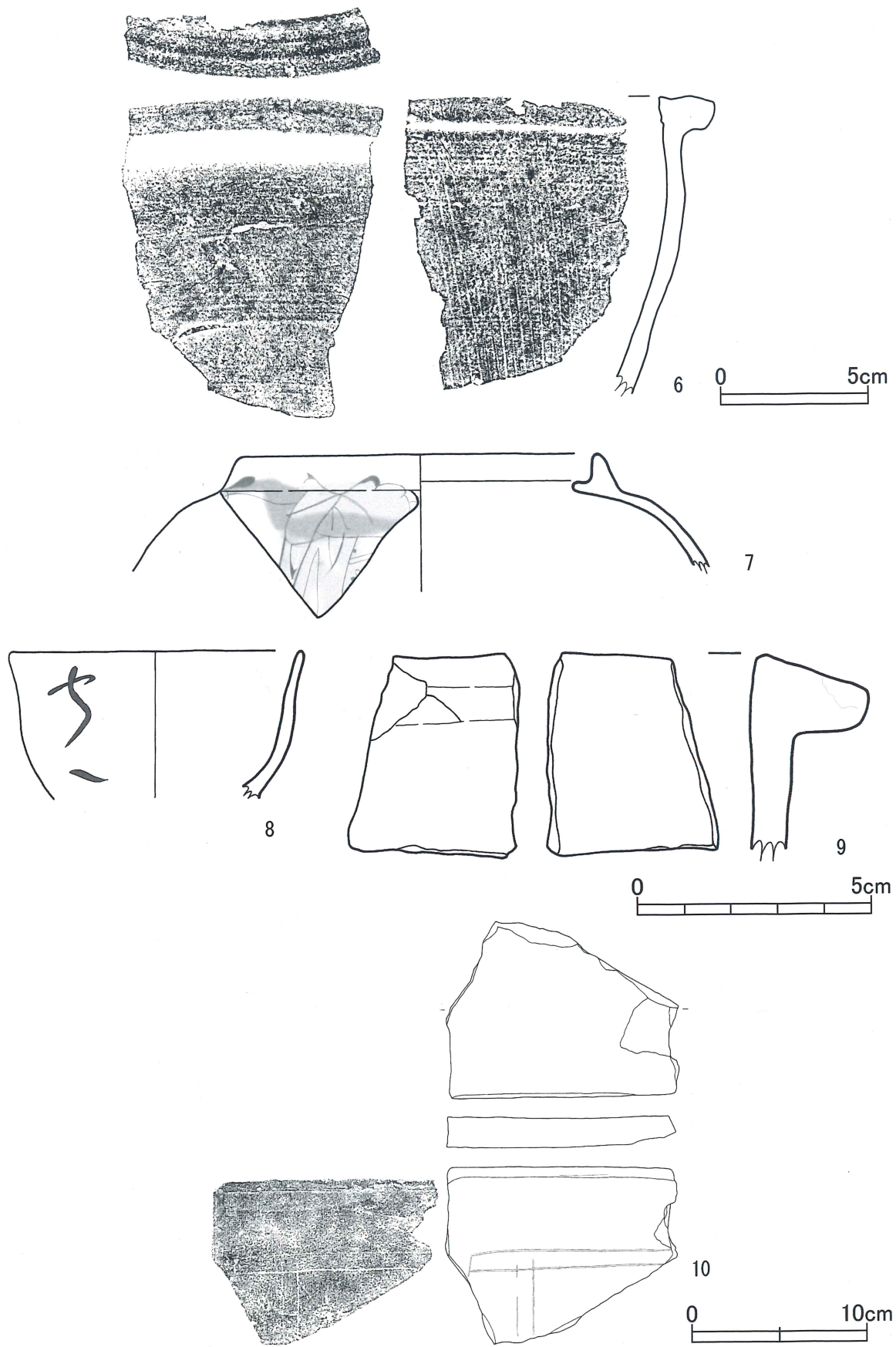
土坑2



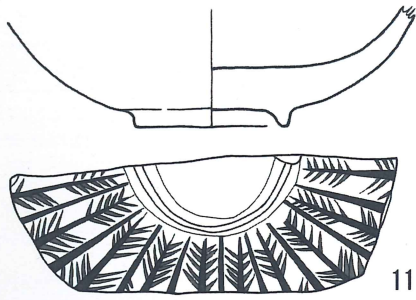
第9图 柱穴·土坑实测图



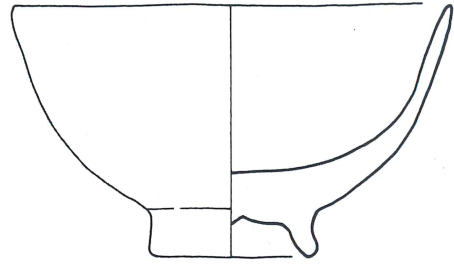
第10図 出土遺物(1)



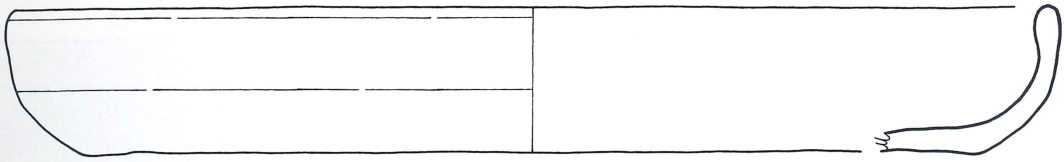
第11図 出土遺物(2)



11



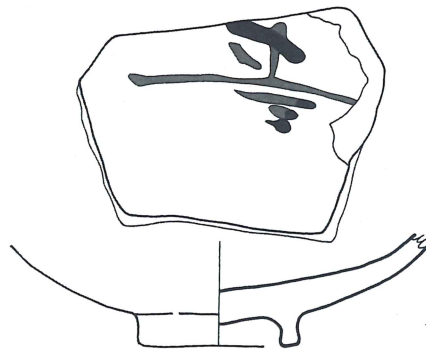
12



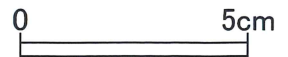
13



14



15



第12図 出土遺物(3)

第2表 遺物観察表

挿図番号	遺物番号	器種	出土トレンチ	出土層	時代	備考
10	1	碗	1	Ⅱ・Ⅲ	不明	竜泉窯系青磁碗片
	2	碗	3	Ⅱ・Ⅲ	中世	白磁
	3	碗	3	Ⅱ・Ⅲ	近世	肥前磁器
	4	皿	1	Ⅲ	近世	肥前磁器
	5	甕・壺	1	Ⅲ	近世	薩摩苗代川系
11	6	播鉢	1	Ⅲ	近世	薩摩苗代川系
	7	急須身	2	表採	近現代	
	8	小杯	1	Ⅲ	近現代	白色の色絵
	9	鉢	1	Ⅲ	不明	不明陶器
	10	瓦	1	Ⅲ	現代	(厚さ)1.7cm
12	11	碗	3	Ⅲ	近世	肥前磁器
	12	陶器	3	Ⅲ	近世	薩摩加治木始良系
	13	焙烙	3	Ⅲ	近世	
	14	甕・壺	3	Ⅲ	近代	薩摩苗代川系
	15	碗	3	Ⅲ	近世	施釉陶器



1トレンチ



2トレンチ



3トレンチ



4トレンチ



5トレンチ



6トレンチ

写真図版1 平成28年度調査状況(1)



遺物出土状況



遺物出土状況



検出遺構



検出遺構



調査風景



調査風景

写真図版2 平成28年度調査状況(2)



検出遺構

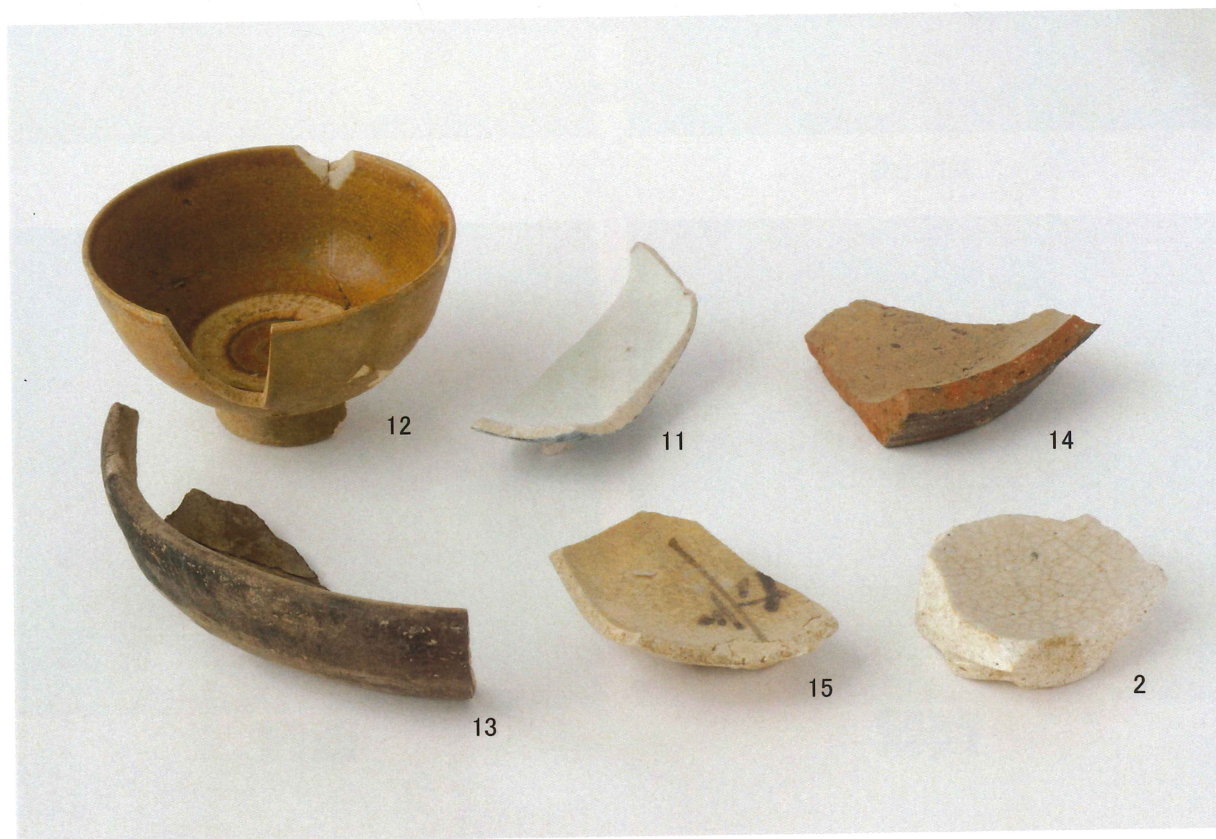


調査風景



調査風景

写真図版3 平成29年度調査状況



写真図版4 出土遺物

第IV章 上能野貝塚出土遺物再整理の概要

第1節 遺跡の位置と環境

上能野貝塚は西之表市の西南部、住吉の西海岸上能野に所在する。標高 17mの砂丘上に遺跡は立地し、西南方向の海側へ傾斜し、大町川が形成する低地へ急な崖をなして臨む。遺跡周辺の海岸部一帯は、砂丘が発達している。当地からは、晴天時には海を隔てて馬毛島をはじめ、大隅半島・硫黄島・竹島、さらには薩摩半島の開聞岳まで見渡すことができる、非常に眺望の優れた場所である。砂丘の他には海岸段丘が発達し、浸食谷が広がり、尾根上になる地が見られ、その地にも遺跡が形成されている。周辺の遺跡の数は少ないが、今後の分布調査等で遺跡が発見される可能性は大いにある地である。

嶽ノ中野B遺跡は、住吉能野の標高 80mの海岸段丘上に位置し、平成 6 年に鹿児島県立埋蔵文化財センターが発掘調査を行っている。調査の結果、上能野式土器の良好な資料が確認され、比較的短期間の遺跡の存立が想定されたが、生活遺構等は発見されていない。上能野式土器は大隅諸島独特の土器型式と言われ、その類例がまだ少なく、不明な点も多い。

独特という点では、上能野貝塚の近くに位置する能野焼窯跡（西之表市指定文化財 史跡 昭和 50 年 2 月指定）が特筆される。

能野焼は、西之表市住吉能野で明治 35 年まで製作していた陶器で、種子島特有の砂鉄を含んだ粘土を用い、島内で使用するありとあらゆる器種を作っていたのが大きな特徴である。それは、どっしりとした男性的な力強さと生活に根ざした素朴さを持ち、昭和 40 年ごろの民芸ブームで大きく注目された。

能野焼の起源ははっきりしないが、享保 11 年（1726）と線刻された大甕の存在から、この時期には窯が開かれていたと考えられる。南方系（琉球・東アジア）と朝鮮系両方の影響を受けていると言われるが、影響を受けた時期、経緯等は不明である。

朝鮮系の技術の伝播には諸説あり、今後の研究課題である。また薩摩焼の黒もん、黒薩摩（苗代川系）の影響も受けており、薩摩焼との関連も注目される。

能野には幕末、アメリカの測量船が寄港し、島主をはじめ島民と交流をおこなった記録も残っている。当該地は本市の歴史を知る上でも、様々な情報を提供してくれる地である。

第2節 上能野貝塚について

上能野貝塚は、西之表市教育委員会の依頼を受け、鹿児島県文化財専門委員 河口貞徳氏らによって昭和 47 年 3 月 24 日から 30 日まで、7 日間、発掘調査が実施された。調査はA・B・Cと3カ所のトレンチを設置しての調査であり、調査面積は約 30 m²であった。

調査の原因は昭和 45 年の集中豪雨で遺跡が一部崩壊したため、貝層が露出し遺物の一部が地表に流失しはじめたためである。鹿児島県教育委員会の現地視察等もふまえ、西之表市教育委員会が遺跡の保存保護を図るため、発掘調査を実施することとしたためである。

昭和 47 年 3 月発行の上能野貝塚発掘概報（西之表市教育委員会）で著者である河口氏は、貝塚



遺跡 No.	遺跡名	所在地	時代
213-13	上能野貝塚	鹿児島県西之表市住吉上能野	弥生時代、古墳時代
213-26	能野焼窯跡	鹿児島県西之表市住吉上能野	歴史
213-45	仏ヶ峯遺跡	鹿児島県西之表市住吉下能野	奈良時代、平安時代
213-64	嶽ノ中野A	鹿児島県西之表市住吉上能野	古墳
213-65	嶽ノ中野B	鹿児島県西之表市住吉上能野	古墳



第13図 上能野貝塚及び周辺遺跡位置図・周辺遺跡地名表

周辺には埋葬址があり、昭和45年の集中豪雨で貝塚が発見される以前に、何回かの遺物（貝製品等）や人骨の発見があったことを惜しんでいる。しかし、現存の遺跡の中にも埋葬遺構の残存があり、貝塚と同一時期のものと推定されている。

上能野貝塚からの出土土器は極めて特徴的であり、上能野式土器として型式設定された。時期については弥生時代後期とされていたが、近年の研究では古墳時代と考えられている。調査地周辺から、当時の住吉中学校生徒が掘り出した、ほぼ完形の釣鐘形をした甕型土器（巻頭カラー写真掲載）は、上能野式土器を代表するものとして、広く知られることとなった。また、貝輪や貝符、錘飾などの貝製品や骨格器などが出土している。（巻頭カラー写真掲載）

また、獣骨や魚類・貝類などの自然遺物も多数出土している。特筆されるのは、鉄製品の出土である。（巻頭カラー写真掲載）鉄製の釣り針が出土しており、この時期の鉄製品は他地域では類例が少なく、鉄の流通や製鉄技術等を考えるうえで大きな発見であった。この鉄製品は西之表市指定文化財（平成22年3月指定）となっている。いずれにしても、古墳時代の貝塚であり、出土土器は極めて地域性の強い土器の一型式のみであり、鉄製品も出土し、隣接して同時期の埋葬址も形成していると推定される、種子島及び大隅諸島にとって、貴重な遺跡である。

しかしながら、昭和47年の発掘調査成果については、上能野貝塚発掘調査概報（西之表市教育委員会）や鹿児島考古第7号（鹿児島県考古学会）などで、調査の概要や出土遺物等の断片的な紹介がなされているのみに過ぎず、出土遺物の全容等については発表・公開はこれまででなされておらず、現在までの約半世紀間、出土遺物は未整理のまま、西之表市の種子島開発総合センターで静かに保管されていたのである。

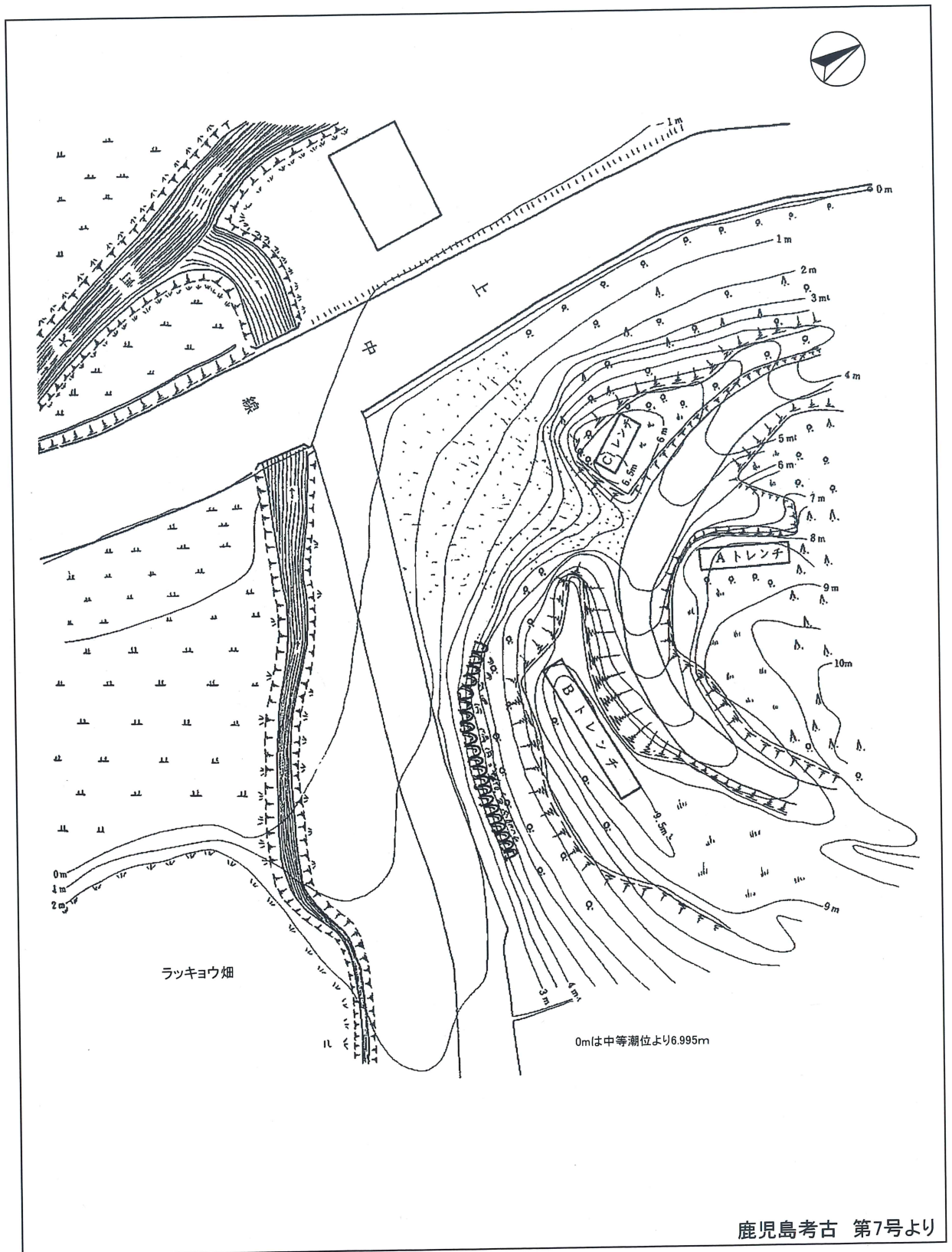
第3節 出土遺物再整理事業

近年、大隅諸島独特の土器型式のひとつとされる、上能野式土器出土の報告例が増えてきた。上能野式土器は、上能野貝塚出土土器を標識とする土器である。西之表市教育委員会は、昭和47年に発掘調査が行われた西之表市上能野貝塚の出土遺物が本市に保管され、整理作業が行われていない状況に対して、地域の歴史を後世に遺し伝えて行く事と、上能野貝塚の出土遺物の公開を図るため、国・県の補助を受け種子島開発総合センターで保管されていた未整理の、上能野貝塚出土遺物の再整理に平成28年度から平成30年度まで着手することとした。

なお、本概報にて今回、図化し報告する遺物は一部を除き、全て未発表・未公開資料である。

昭和47年の調査ではA・B・Cとトレンチを3カ所設置している。さらに各トレンチ内を細分し、Aトレンチは約2mおきにⅠ～Ⅳ区に細分、Bトレンチも約2mおきにⅠ～Ⅶ区に細分、Cトレンチも約2mおきにⅠ～Ⅲ区に細分している。

遺物のなかには、上ヨキノA-1-3、上ヨキノB-2などとの注記がされているものが見られ、前者は上能野貝塚Aトレンチ、第1区、第3層出土、後者はBトレンチ、第2区出土として注記がされたものと思われ、この注記が整理作業を進めていくうえで、参考となった。ただし、注記を行っている遺物は、未整理遺物数の半数にも遠く及ばない状態であった。



第14図 上能野貝塚トレンチ配置図

(1) 土器類

未整理遺物のうち、土器片は総数 3,231 点であった。土器は全て上能野式土器の範疇に入るものである。上能野式土器は、器種は甕の単一型式であり、口縁部は肥厚して断面は三角形状になる。器形は釣鐘形を呈し、やや上げ底の充実した脚台。胎土は砂粒を含み、焼成は極めて良好、ハケメやヘラ調整が施される。鋭い沈線文の並行線を基本に、直線や曲線の山形や変形文が口縁部から胴部上位に施され、胴部中央部には刻みを有する平坦な突帯を巡らし、その接点から垂下するものも見られる。同じ形状の無文土器の存在も確認されている。

今回整理を行った土器片の部位は、胴部片が最も多く 2,855 点であり、次に口縁部の 367 点、底部(脚部)は 9 点であった。次に注記による出土区から見ると、A トレンチから出土したものは 80 点、B トレンチのものは 1,058 点、C トレンチからはわずか 5 点の出土であり、出土層は全て第Ⅲ層である。但し、未注記で出土地不明の土器片が 2,088 点と全体の約 65% を占めていることには留意する必要がある。(未注記土器片 口縁部 172 点、胴部 1,913 点、底部 3 点 合計 2,088 点)

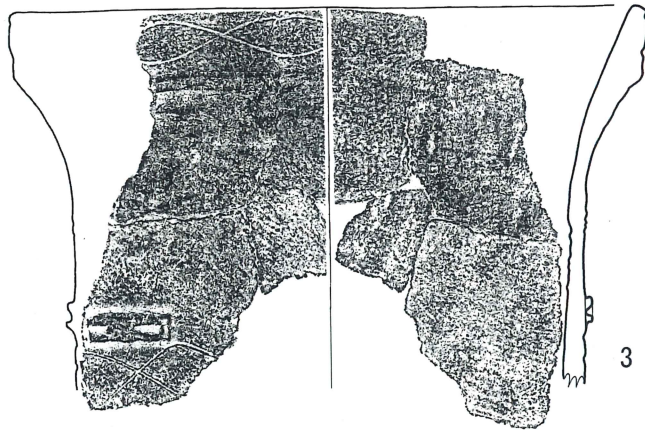
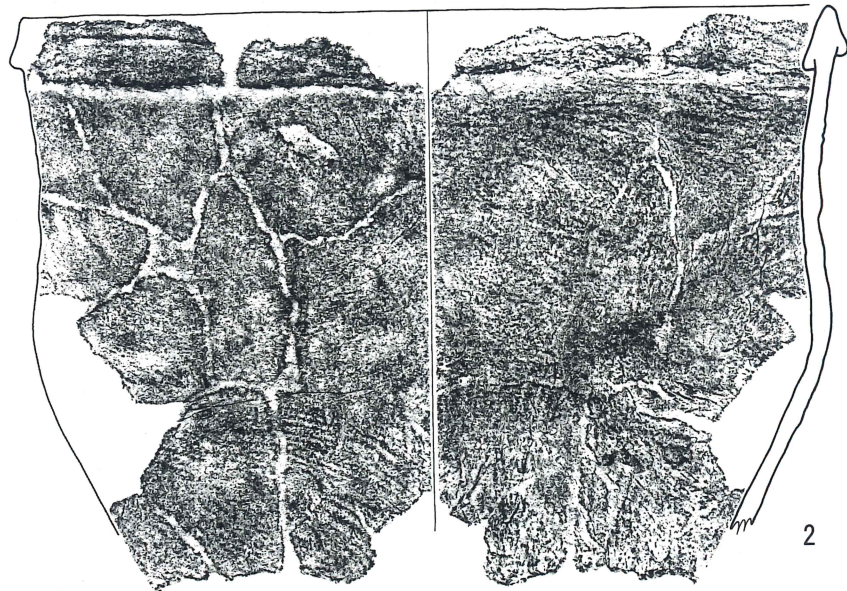
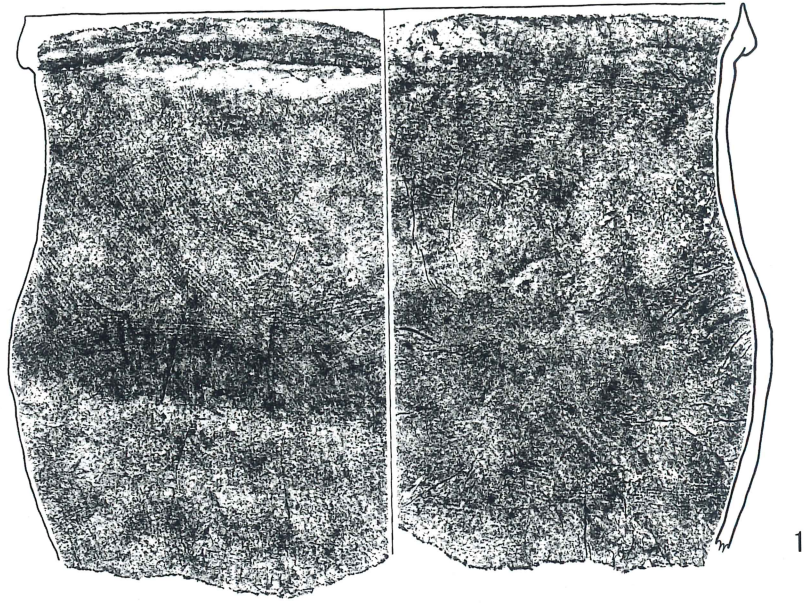
今回、新たに図化し報告する土器片は 101 点である。主に口縁部に特徴のある土器片を選別した。

1 から 3 はやや大きめの口縁部から胴部片である。1 は上能野貝塚採集資料で、内面に墨書で昭和 46 年 11 月 25 日、能野貝塚出土、採集者名が記されている。口縁部に三角形状の粘土を貼り付け、肥厚口縁を呈するものであり、外面にはハケメで直線や弧状の曲線沈線文が施されている。焼成は良好で、胴部下位部分は煮炊きによる影響か、薄黒い領域が横位に広がる。器形は胴部が張り出す特徴がある。2 も 1 と同じく、口縁部に三角形状の粘土を貼り付け、肥厚口縁を呈するものであるが、口縁部内面にも、粘土が貼り付けられている。外面にはハケメで文様が描かれているが、極めて浅い施文であり、はっきりしない。内面にも一部ハケメでの調整痕がわずかに見られる。器形は胴部が張り出す特徴が見られる。3 は三角形状肥厚口縁部が消失し、四角形状肥厚口縁を呈するものである。焼成は極めて良好で、口縁部には鋭い 2 条の沈線文が曲線を描きながら交差している。胴部中央部には刻みを有する平坦な突帯を巡らす。この突帯の下位には、口縁部と同じく鋭い 2 条の沈線文が曲線を描きながら交差するように施文が施されている。器形は 1・2 と比較して胴部の張り出しが見られないものである。

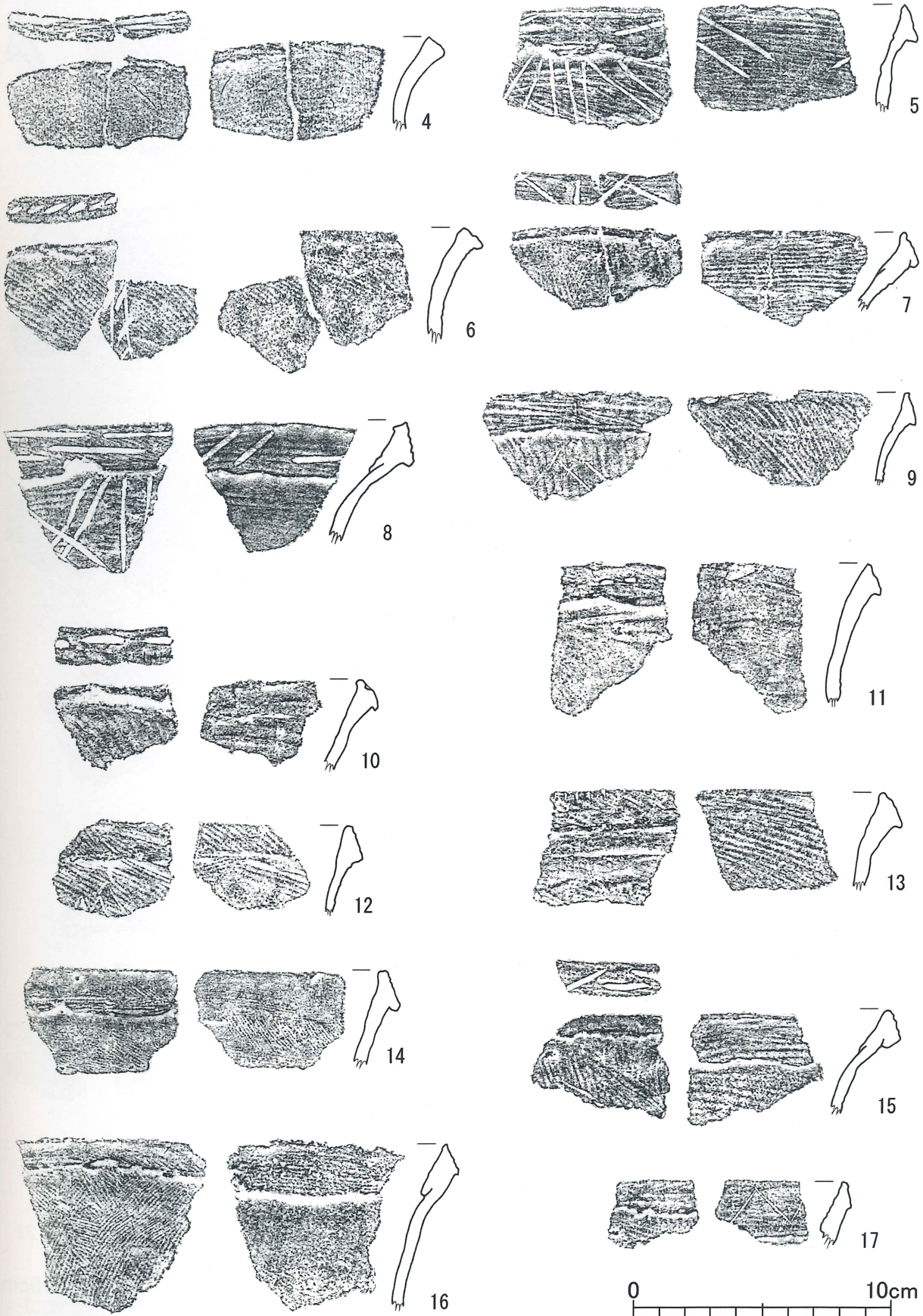
4 から 53 は口縁部片である、全て肥厚口縁部を呈するが、その形状により①から③と、3 つに細分化することができる。

①4 から 22 は 1・2 と同様、口縁部に三角形状の粘土を貼り付け、肥厚口縁を呈するものであり、外面にはハケメで直線や弧状の曲線沈線文が施されているものである。一部平坦状の粘土を貼り付けるものもあるが、外見上は三角形状の肥厚口縁部となるものである。胎土には金雲母を含むものが多数見られ、種子島には産しない鉱物が混在しており、土器の製作地や粘土の採集等について、調査を進めていく必要がある。また土器の表面の色調は後述するものに比較し、黒色を呈するものが目立つ。全体的に、西之表市馬毛島椎ノ木遺跡出土土器に類似する資料である。

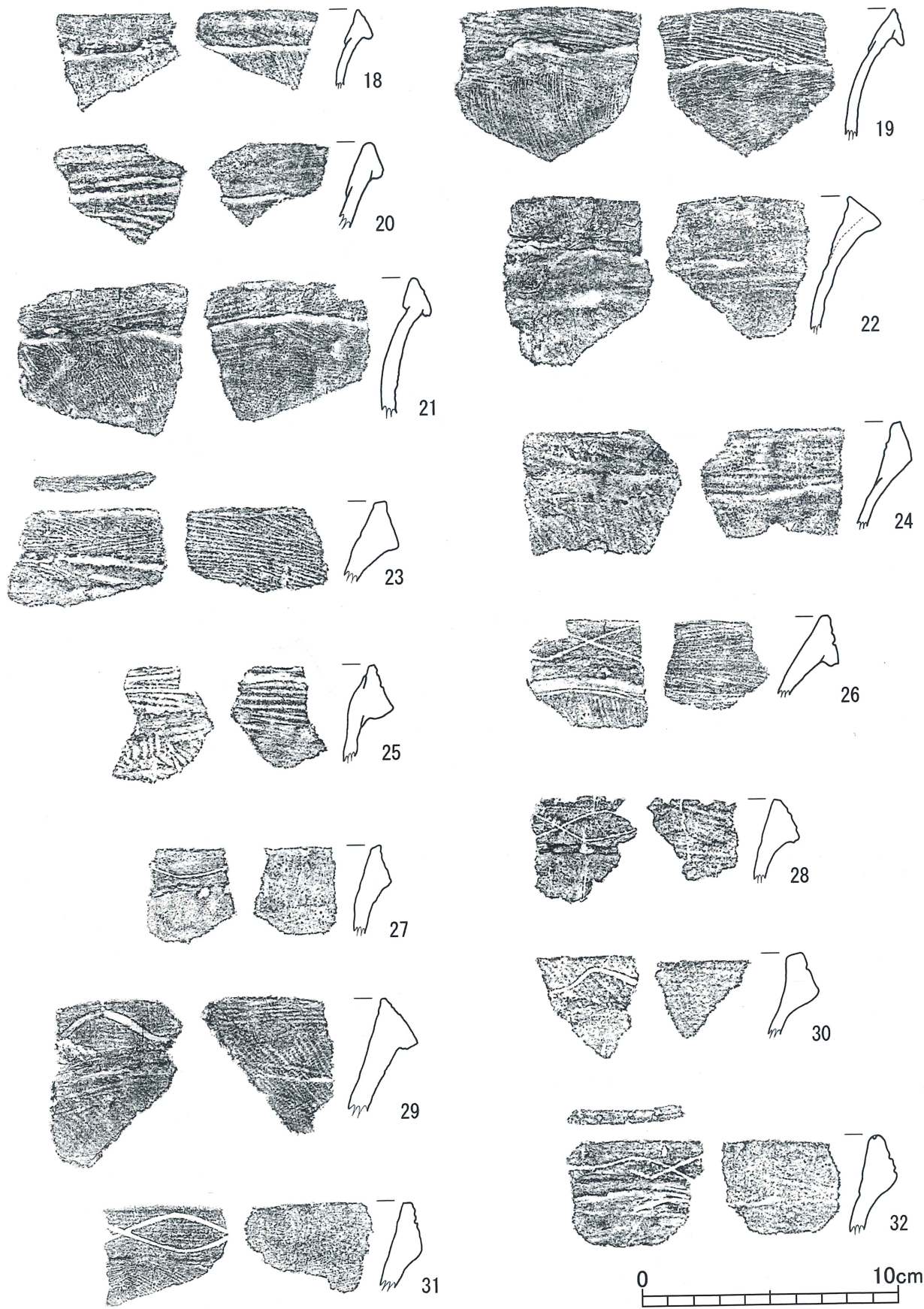
②23 から 45 までは、基本的に三角形状肥厚口縁を呈するが、口縁部外面に粘土板を貼り、四角形や方形状の肥厚口縁となるものである。焼成は極めて良好で、砂粒を多く含み、文様は鋭い沈線文が並行線、曲線を呈しながら変形文や山形を描いたり、直線を施すものである。胴部中央部



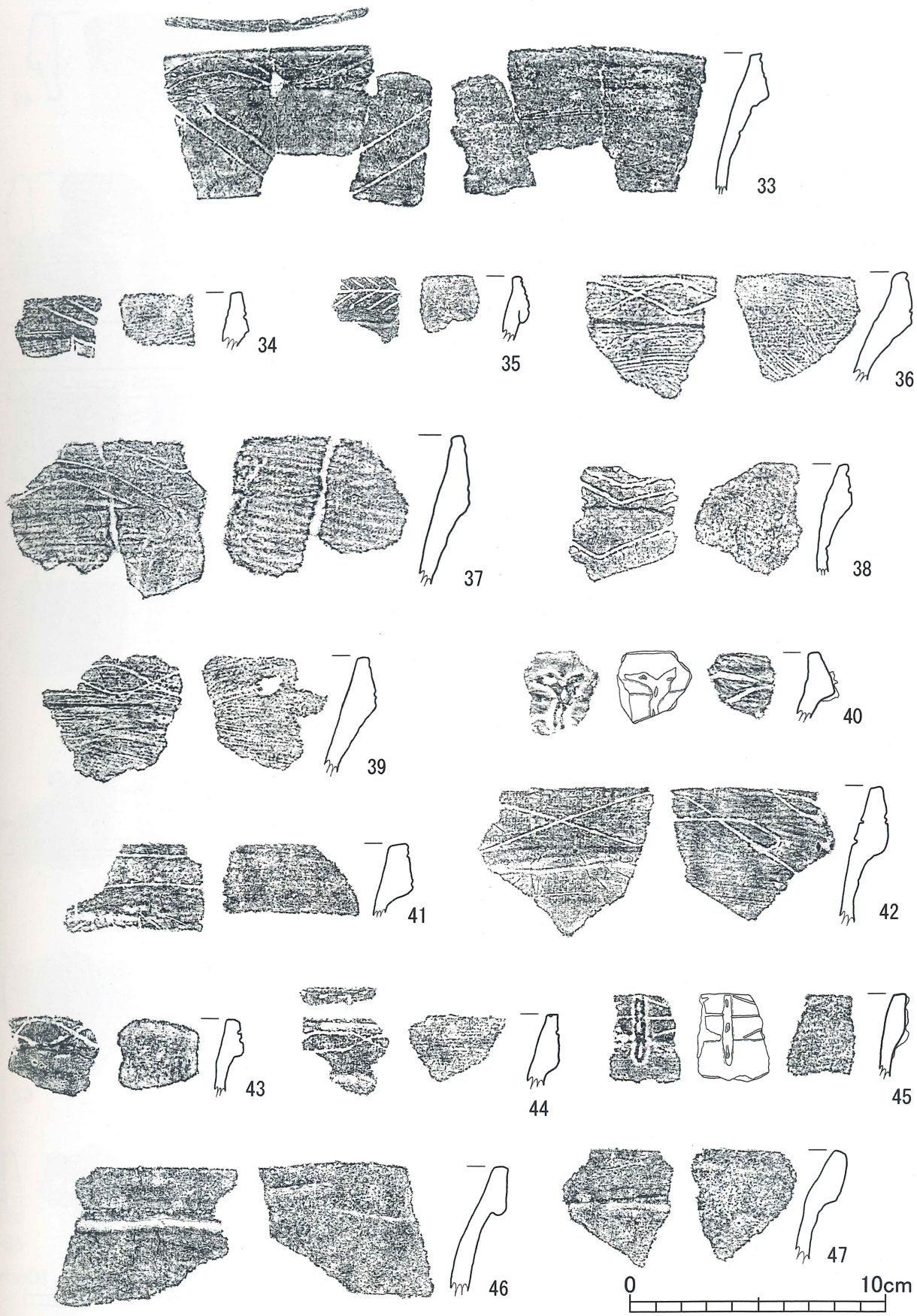
第15図 出土土器(1)



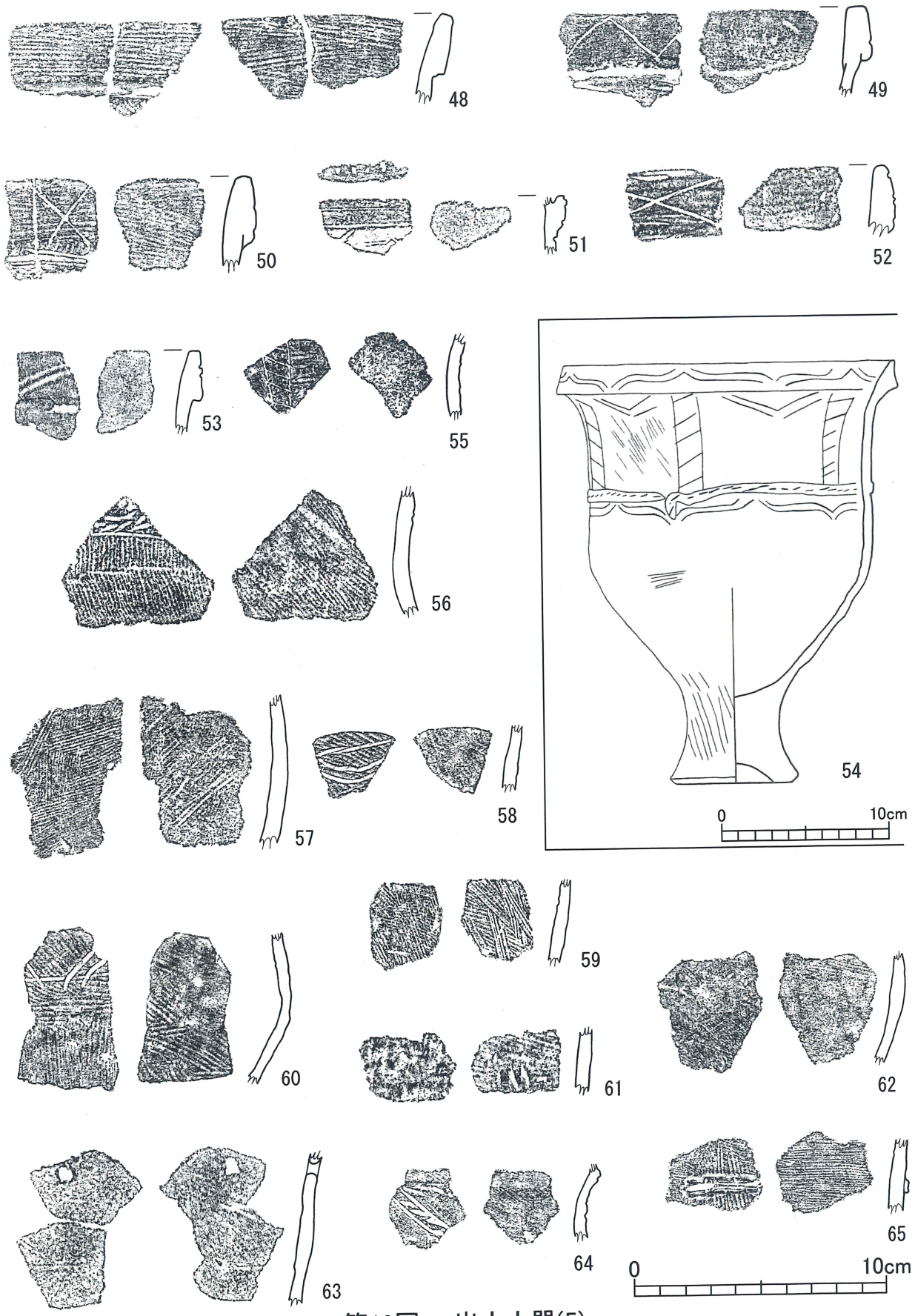
第16图 出土土器(2)



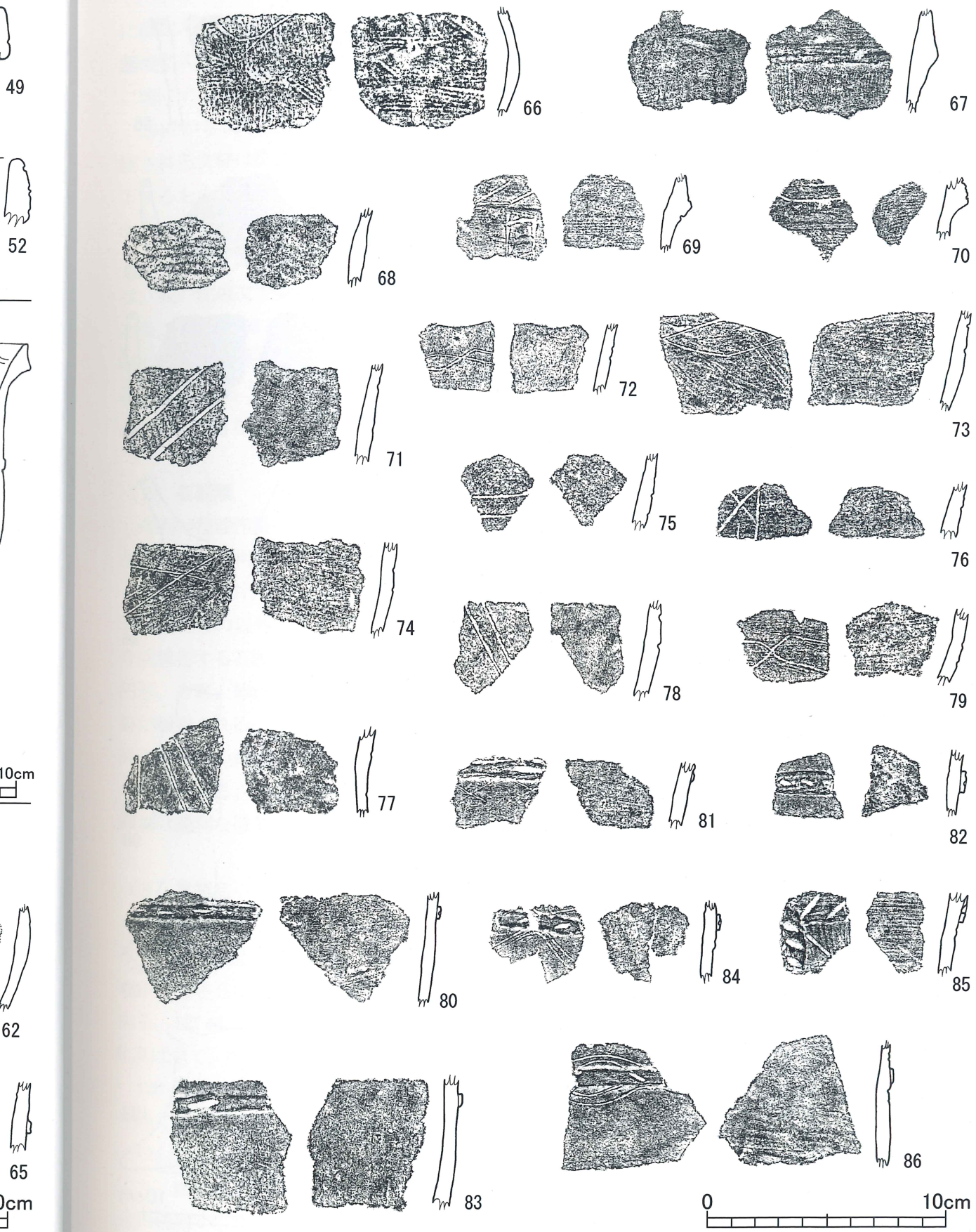
第17图 出土土器(3)



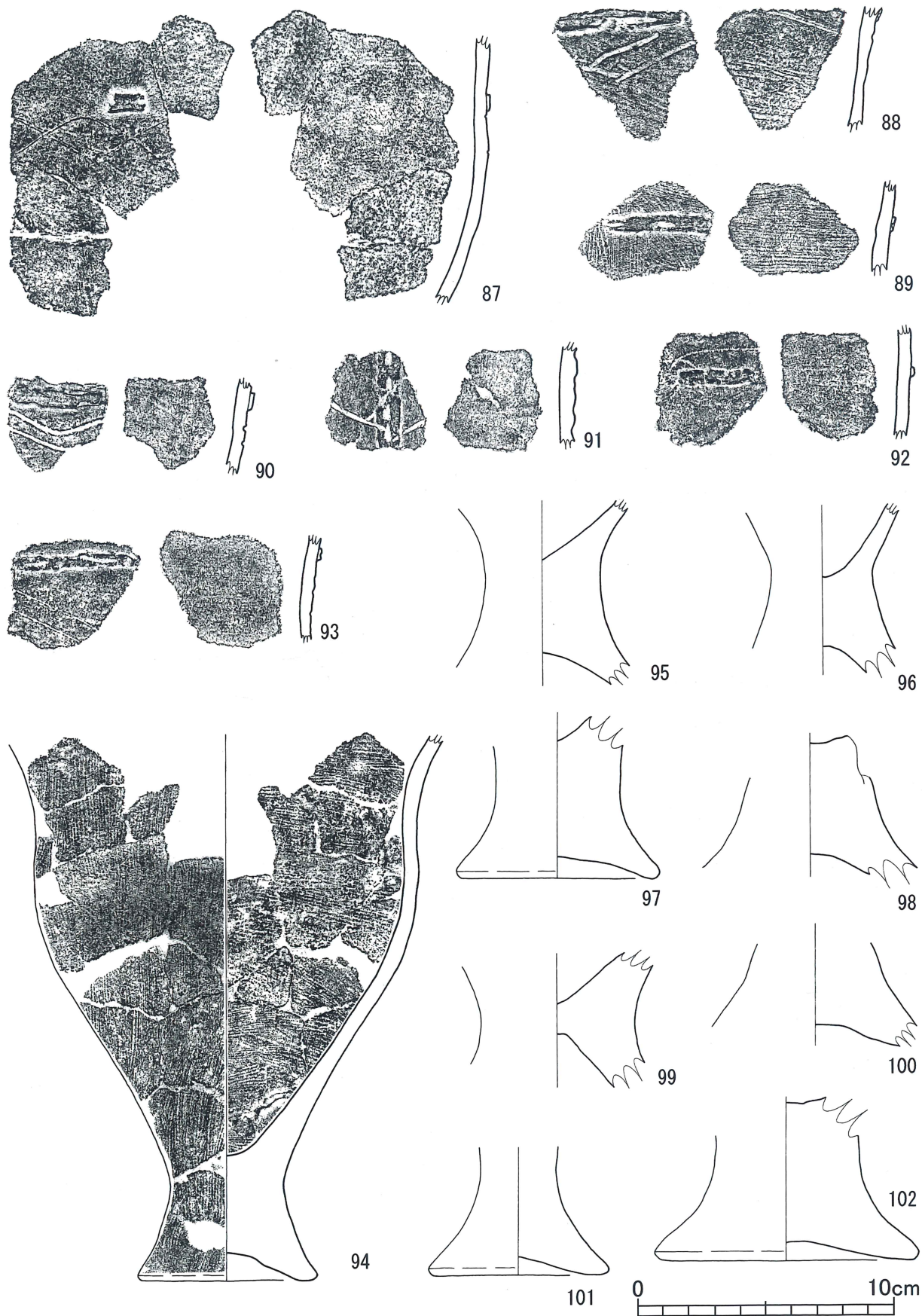
第18图 出土土器(4)



第19图 出土土器(5)



第20图 出土土器(6)



第21図 出土土器(7)

には刻みを有する平坦な突帯を巡らし、その接点から垂下するものも見られる。54 は上能野式土器の型式設定となった、西之表市上能野貝塚より出土した土器であるが、②としたものは、これに類似する資料である。

③46 から 53 は三角形状肥厚口縁部がほぼ消滅し、四角形状口縁部を呈するものである。表面に施される文様は②に類似する。胴部中央部には刻みを有する平坦な突帯が巡り、その接点から垂下するものも見られる。③としたものは、西之表市嶽ノ中野B遺跡出土の土器に類似したものである。

55 から 93 は胴部片である。55 から 68 は器面にハケメ調整が見られるものである。69 から 79 は、鋭い沈線文で並行線を基準とし直線あるいは、曲線の、変形文や山形が描かれているものである。80 から 93 は外面に、刻みを有する平坦な突帯を巡らすもので、垂下するものも見られる。94 は胴部から底部(脚部)までの、ほぼ完形土器である。外面内面ともにハケメ調整痕が顕著に見られる。95 から 102 は底部(脚部)である。上げ底であり、器面にハケメ調整が見られるが、はっきり確認できないものがある。また、脚部下位が外側に張り出すものも見受けられる。

(2) 石器類

今回の整理作業を行った結果、保管されていた石器類は 205 点であった。うち 149 点は自然礫であり、石器と判断したものは、56 点である。

器種は石斧片、磨石、敲石、磨・敲石(片)、礫器、石錘等である。石器については、自然礫と判断したもの以外は全て注記が施されており、その大半はBトレンチからの出土である。なお、今回報告する石器の石材は全て砂岩である。103 から 120 は磨石・敲石類である。円形のものや楕円形、方形、棒状の礫を使用し、破損したものも見受けられる。121 は礫器であり、自然面の剥離等が観察される。122 は石錘であり、両側面に大きな加工痕が残る。123 は用途不明の石器である。両面に横位の細線が 16 条から 20 条刻まれ、一部は右下がりに刻まれ、横位の線と交差しているものも見られる。表面・裏面ともに全面研磨をしているようにも見えるが、自然面の可能性もある。線刻は鋭利な道具で施されており、鉄器の使用が推測される。

(3) 貝製品

貝製品は、オオツタノハ貝輪 3 点、ゴホウラ貝輪 1 点、夜光貝貝匙 1 点、クロミナシ加工品 1 点、イモガイ加工品 1 点の合計 7 点を図化した。膨大な自然遺物資料を丹念に精査し、貝を抽出、その中からさらに人為的な加工痕があるものを選別しながら作業を進め、新たに発見されたものである。127 は、昭和 47 年 10 月上能野貝塚で採集されたものであるが、初公開資料となる。残りの 6 点は全て、今回の整理作業で新たに発見されたものである。

128・130 は注記が見られたが、他は全て注記なしのため、出土区・出土層は不明である。127 を除く資料は全て、自然遺物の資料の中に混在した状態での発見であった。

124 から 126 はオオツタノハ貝輪の破片資料である。124 は白色を呈し、全体的に丁寧な研磨により、螺肋の凹凸はほぼ消滅しているが、原貝の様子は残存している。125 は螺肋の凹凸がほぼ完全に消滅するほど入念な研磨が施されているが、原貝の様子は残る。126 も研磨が施されているが、

螺肋の凹凸が著しく目立ち、原貝の模様は残存している。127 はゴホウラ貝輪片であり、昭和 47 年に採集されたものである。白色を呈し、2/3 程度欠けている。ゴホウラの背面を利用し、表面は全体的に丁寧な研磨で仕上げられている。形状は端部に丸みを帯びているのが特徴的であり、広田型貝輪と呼ばれるものに類似している。128 は夜光貝加工品である。A トレンチ・第 4 区画・第 III 層からの出土と注記が施されている。貝匙としたが、器種の判断ははっきりしない。白色の真珠光沢を呈し、入念な研磨痕が施されている。裏面には、パラロイド溶液を塗布した痕跡が見られた。129 はクロミナシ貝の加工品である。その形状から貝符未成品の可能性がある。白色を呈しており、表面には研磨等は見られず、文様等も施されていない。上端面には割取ってたたかれた痕跡が確認され、側面には、すり切り痕と見られるものが確認できる。130 はイモガイの加工品である。B トレンチ・第 5 区画・第 III 層出土の注記が確認できる。白色を呈し、上端側面、右側面及び表面には丁寧な研磨が見られる。文様等は施されていない。下端部には 3 ヶ所、加工を行った痕跡が見られる。その形状から貝符未成品の可能性がある。

(4) 骨角器(写真掲載)

今回の整理作業で、鹿角の加工品が新たに 6 点発見された。(写真掲載) これ以外にも、ウミガメや獣骨の加工品と思われる資料も数点新たに確認されているが、今後の精査が必要である。作業の流れは、自然遺物に混在していた資料のため、後述する自然遺物と同様である。

(5) 鉄製品

昭和 47 年の発掘調査で B トレンチから鉄製品(釣り針)が 2 点出土しているが、今回の整理作業で、鉄製品は確認されなかった。

(6) 自然遺物

自然遺物として、獣骨・魚骨・貝類などがある。獣骨・魚骨はパンケース 8 箱であり、ビニール袋等に入れられ、保管されていた。その中の資料を以下のとおり、A から D の 4 つに細分化し、作業を進めた。

- | | |
|------|--|
| 資料 A | 注記あり、『鹿児島考古』16 号で写真掲載された資料と推定(図版番号の不一致) |
| 資料 B | 注記あり、シカを部位ごとに分けてビニール袋に入れてあった資料
イノシシはイノシシで 1 袋にまとめてあった、他種の混在無し |
| 資料 C | 注記あり、未分類(まれに未注記あり)、焼骨・貝・魚骨・獣骨が著しく混在 |
| 資料 D | 注記なし、大きいビニール袋 2 つにまとめられていた資料
まれに鉛筆で「R」「L」と左右が記載
貝類・魚骨・獣骨等が多数混在 |

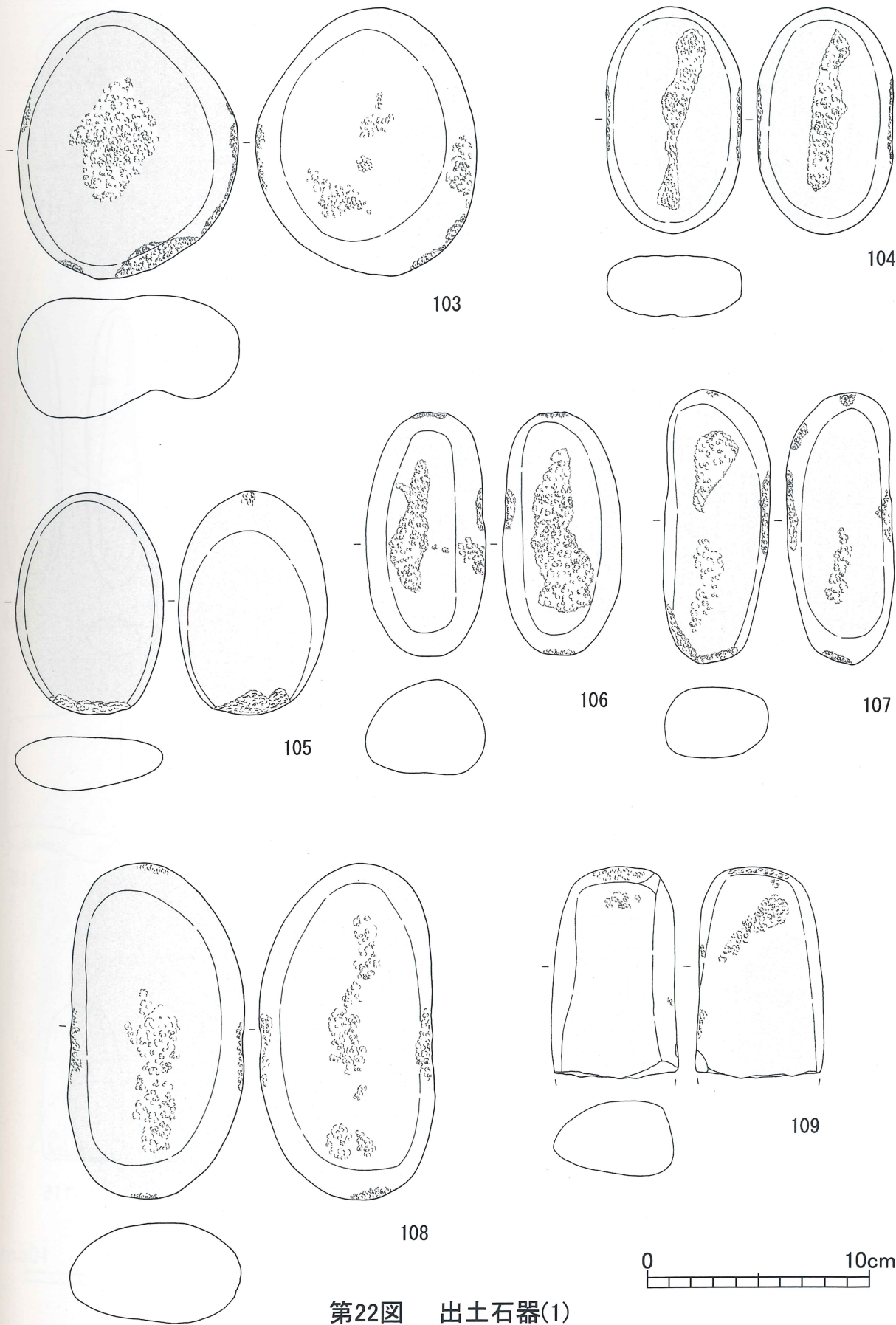
47
は
広
第
真
ら
し
た
で
面

ガ

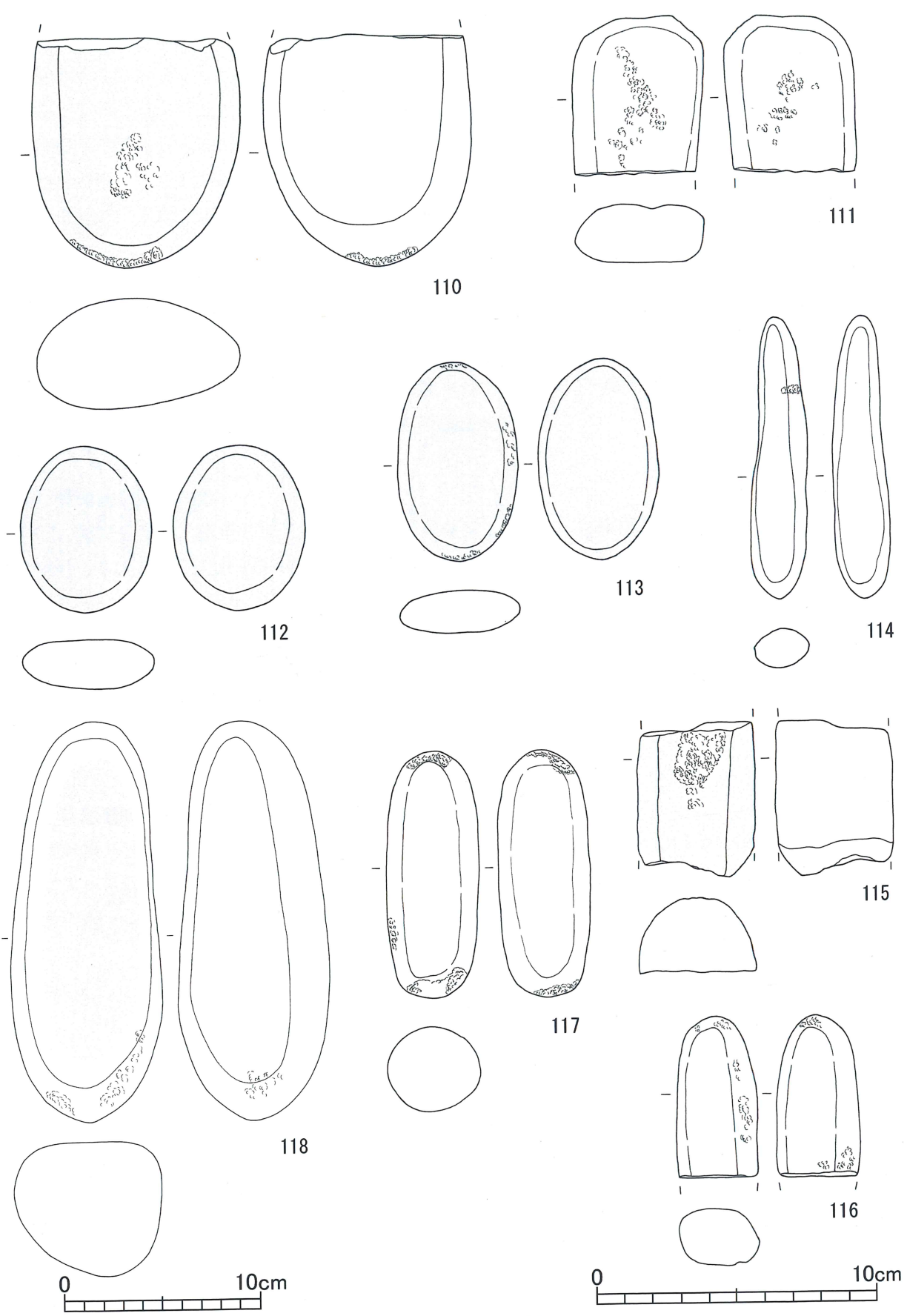
型
作

ル
作

致)



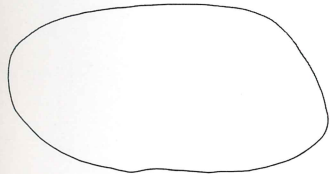
第22図 出土石器(1)



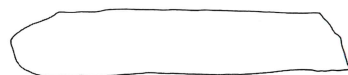
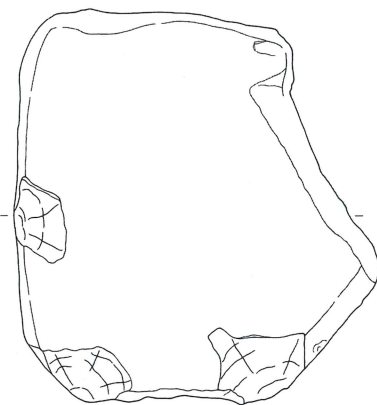
第23图 出土石器(2)



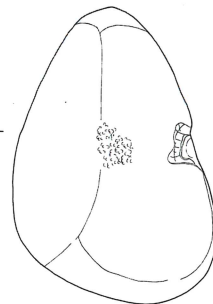
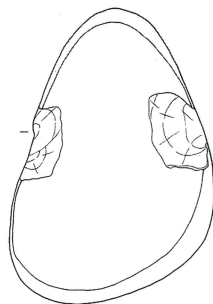
119



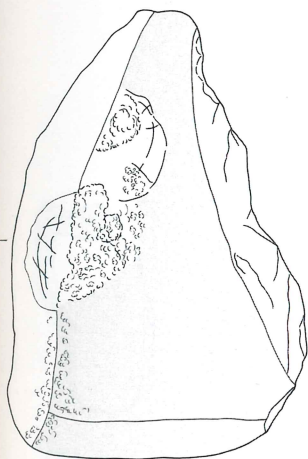
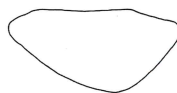
114



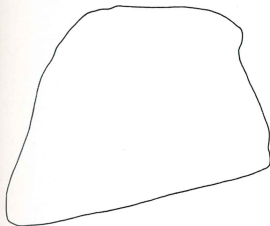
121



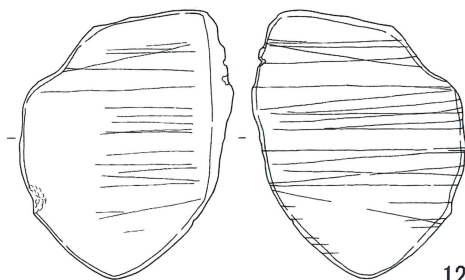
122



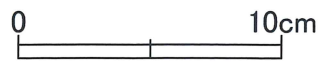
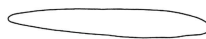
120



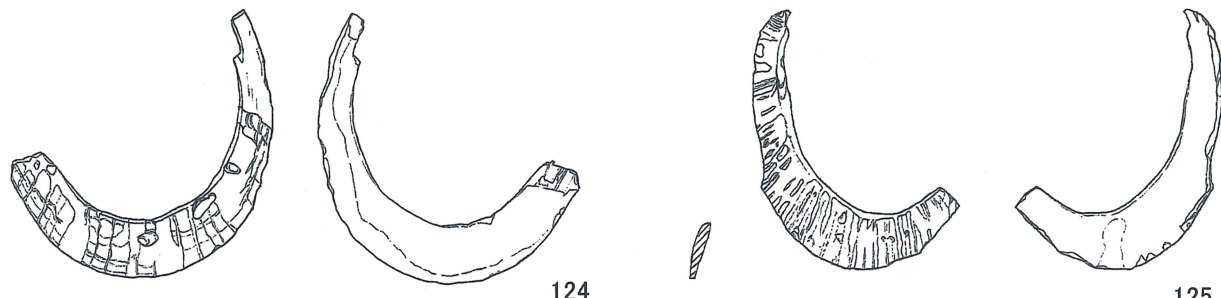
15



123

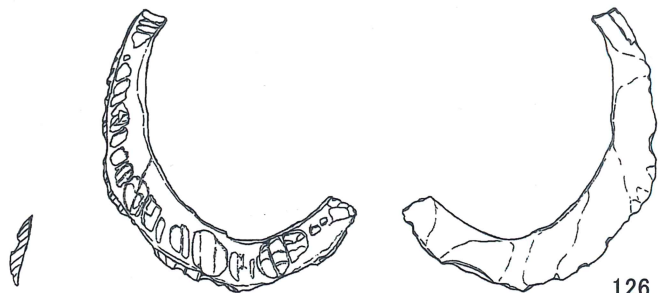


第24図 出土石器(3)



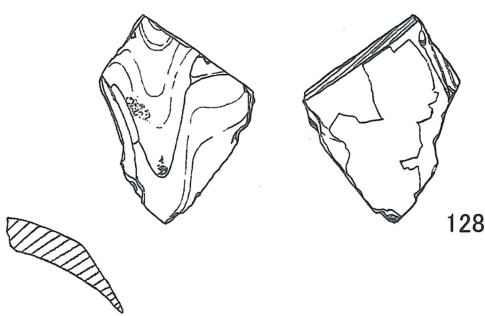
124

125



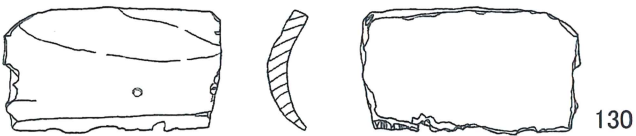
126

127

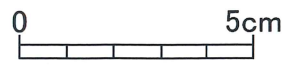


128

129



130



第25図 出土貝製品



125

貝類は全て、未整理の遺物であり、パンケース4箱と新たに発見された土のう袋4袋に納められていた。一部未洗浄の資料もあったため、洗浄から作業を行い、種の同定、数量等の精査を行った。

今回の整理作業で確認された獣骨は、ニホンジカ・イノシシ・ウマ・サル・ネコ・クジラの6種の哺乳類動物の骨片とウミガメ・海獣類（アシカ?）・魚類の骨片と貝類である。

獣骨の主体は、哺乳類のニホンジカである。特筆されるのは、新たにクジラや海獣類の骨片とヒトの乳幼児骨片が確認されたことである。詳細な精査は今後行っていく。貝類は32科、55種が確認された。点数は231点、総重量は1,984gである。獣骨片に比べ出土量は少ないと思われるが、調査時に出土した貝類を全て持ち帰ってないことも考えられる。直近になって、新たに未整理の貝類が土のう袋4袋分発見されたため、今後も引き続き整理を継続する。魚骨片の量は獣骨・貝類と比較すると非常に少なく、全体の1割にもみまない量であった。

cm
□